

# エンジニア 調査レポート

2026年4月版

企業のAI駆動開発の現状と、  
エンジニア採用市場の変化



## 調査結果サマリー

**本調査に回答した企業の  
91.0%が業務にClaude Codeを  
利用していると回答。**

Web系スタートアップ企業においては、  
圧倒的なスタンダードになりつつある。

**現在多くの組織が  
最も注力している課題は  
「AIを前提とした業務プロセスへの転換」**

コーディング領域でのAI活用の成果実感は高く、  
課題がビジネス全般の変革や、運用・品質管理に移行している。

**73.7%の企業が「AI投資予算を  
昨年度よりも増強する」と回答。**

ビジネスサイドも含めたAI利用者の拡大や、  
サービス実装も含めた利用トークン数の増大など、  
AI利用率を高めるためにこれまで以上に投資をすると  
多くの企業が回答している。

**AIの普及を受けてなお、  
4割超の企業が  
エンジニア採用数を増やすと回答。**

ただし、採用したい人材の要件は引き続き高まっており、  
経験値による二極化傾向はますます進行する模様。

## 調査対象者の概要

- 回答企業の規模・エンジニア人数
- 回答者の属性
- 回答企業のAI活用度
- AIが事業に与える影響の見立て

## 01.企業のAI導入・活用状況

- 利用しているコーディングAI
- AIによるアウトプット量の変化
- 開発工程におけるAIの効果実感
- 開発周辺業務におけるAIの効果実感
- AI活用に関する課題感
- AI活用に関する課題の緊急度
- AI活用に関する課題の緊急度 × 重要度
- AI活用のための重要テーマ
- 重要テーマの対応進捗度
- AIにかかる投資予算
- 今年度のAI予算増減の理由
- AI時代の開発組織運営で留意していること

## 02.エンジニア採用・転職に与える影響

- 2025年度の企業のエンジニア採用計画
- 2025年の採用実績と開発組織の人員充足度
- 2026年度の企業のエンジニア採用計画
- 2026年度の企業のエンジニア採用計画の理由
- エンジニア経験度別の採用意向
- 採用優先度が高い職種
- 採用プロセスにおけるAI活用度の影響度
- 企業が採用候補者を評価する経験
- コンピューターサイエンス知識の重要性
- CS知識がないことで現場で起こった問題

本レポートは、Findyを採用目的で利用中の企業に対して下記概要のWebアンケートを実施し集計・分析したものです。

（回答者の所属企業規模・ならびに役職についてはp3に記載しています）。

※小数点第2位を四捨五入した結果を表示しています。 ※一部回答は、読みやすさを考慮して、元の意味を変えない範囲で編集しています。

調査方法：「Findy」または「Findy Team+」を利用中の企業に対してアンケートを実施

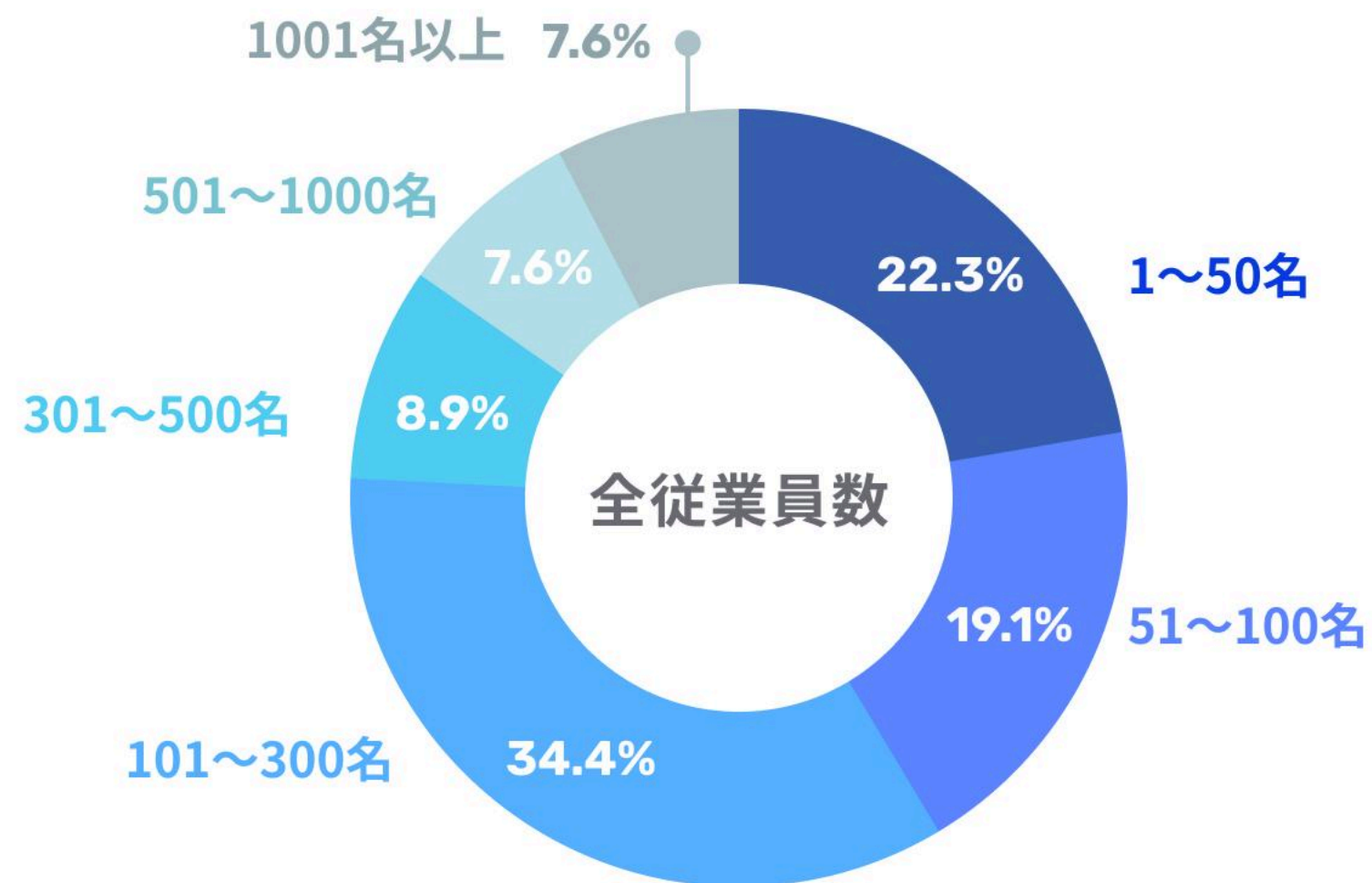
調査名：AI活用と採用に関するアンケート

調査期間：2026年2月19日～3月12日

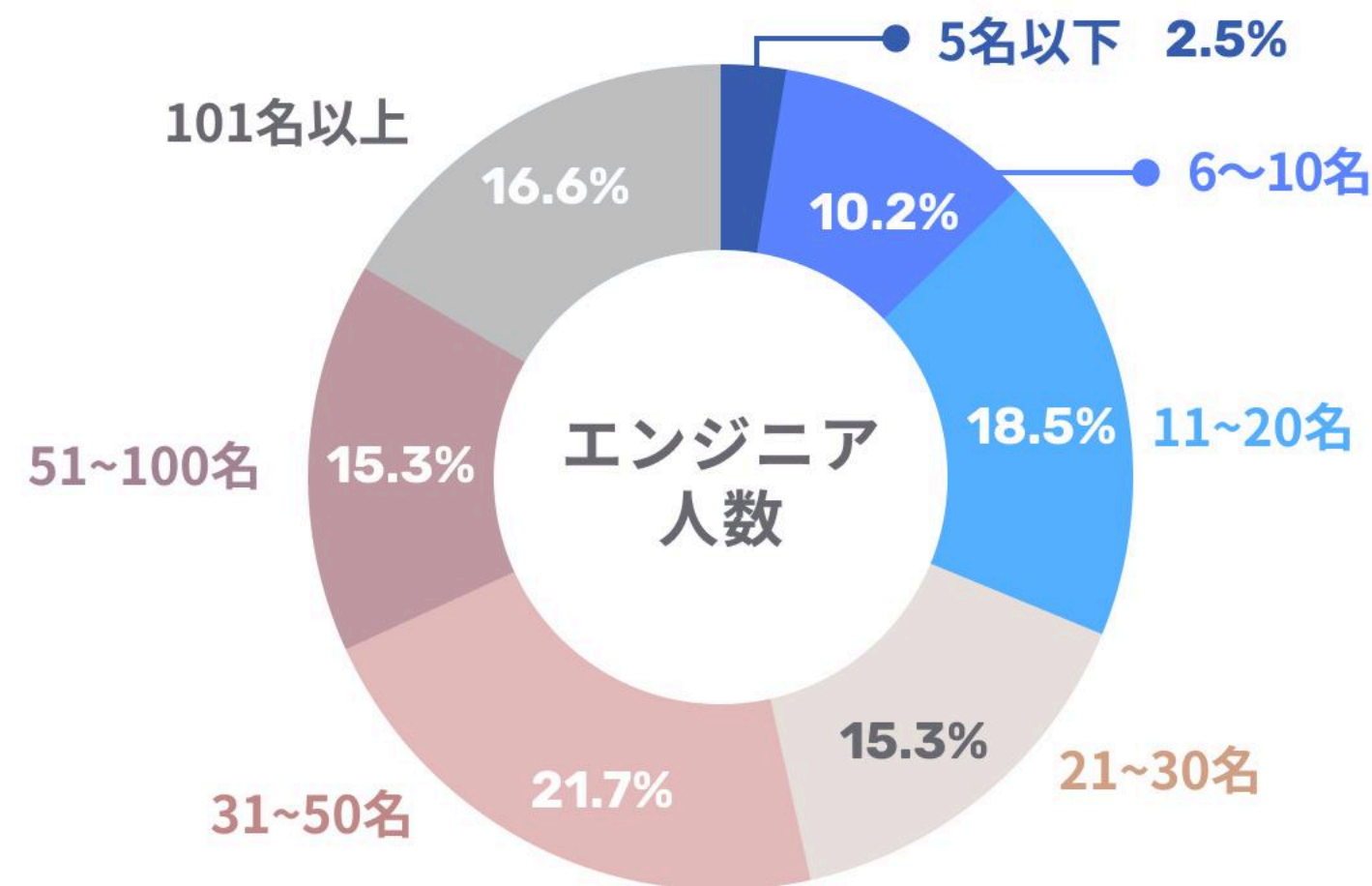
調査項目：最大28問 回答企業数：157社

所属企業は、従業員数300名以下規模のベンチャー企業所属者が中心。  
エンジニアの所属人数は100名未満の企業が8割を占めている。

設問 貴社の全従業員数について当てはまるものをお選びください



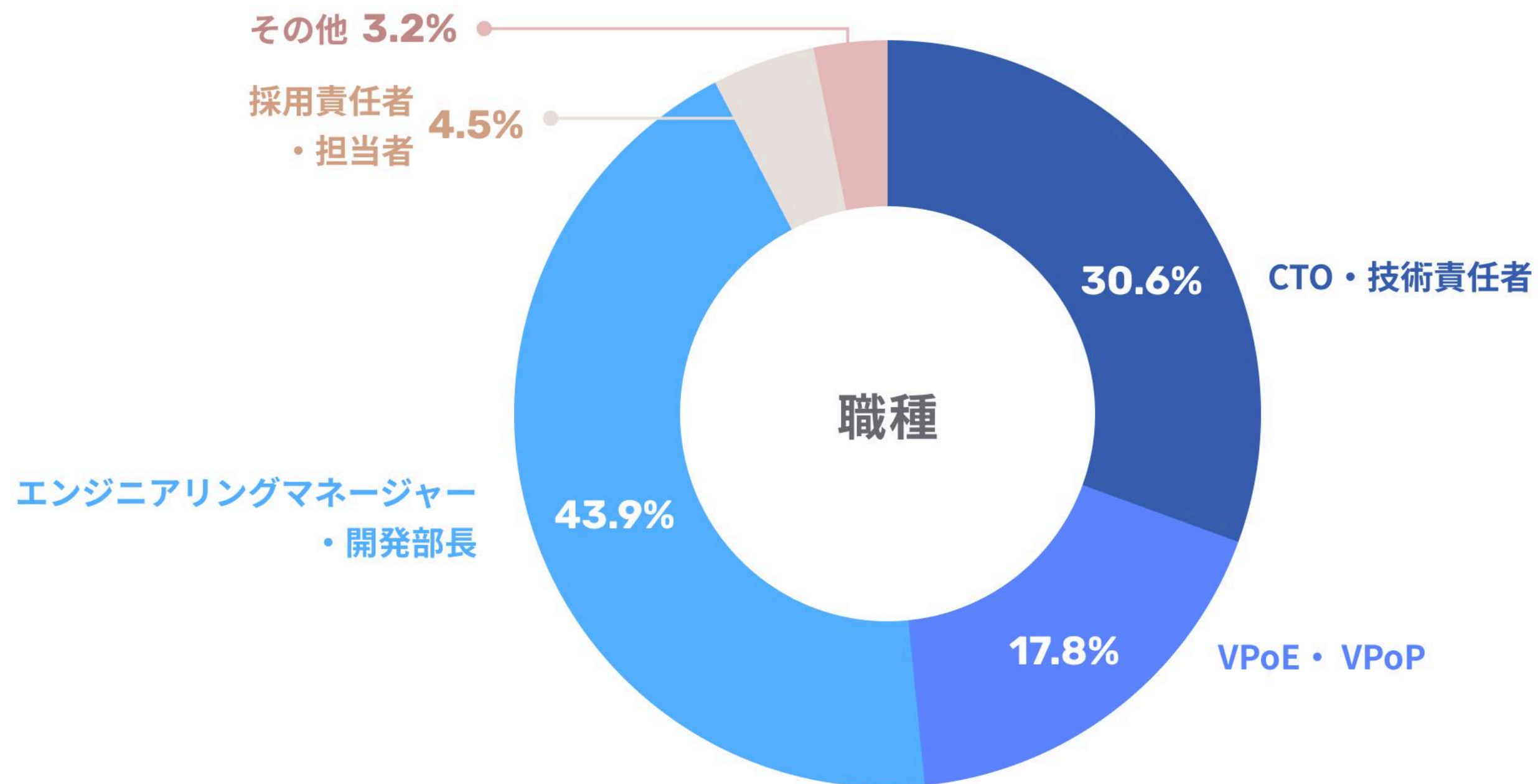
設問 貴社全体でのエンジニア人数として当てはまるものをお選びください



回答者はエンジニアリングマネージャー/開発部長が最も多く43.9%

CTOやVPoEなども合わせて開発組織のマネジメント職が回答者の8割以上を占めている。

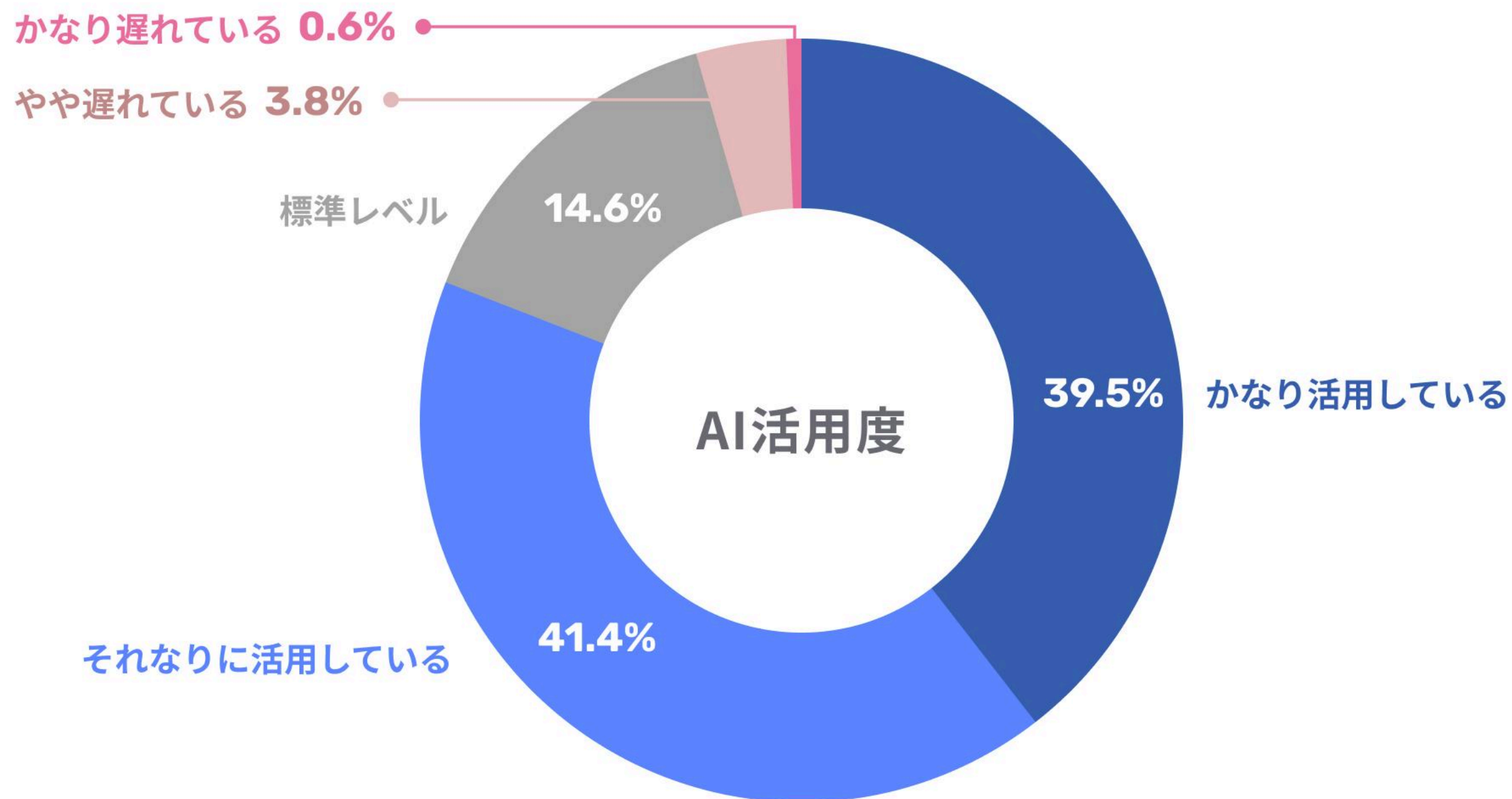
設問 回答される方の職種として最も当てはまるものを1つ選び回答ください



回答企業のおよそ8割が日本企業の中でも「かなりAIを活用している」「それなりに活用している」と答えており、活用率が高い企業の実態調査である点は留意が必要。

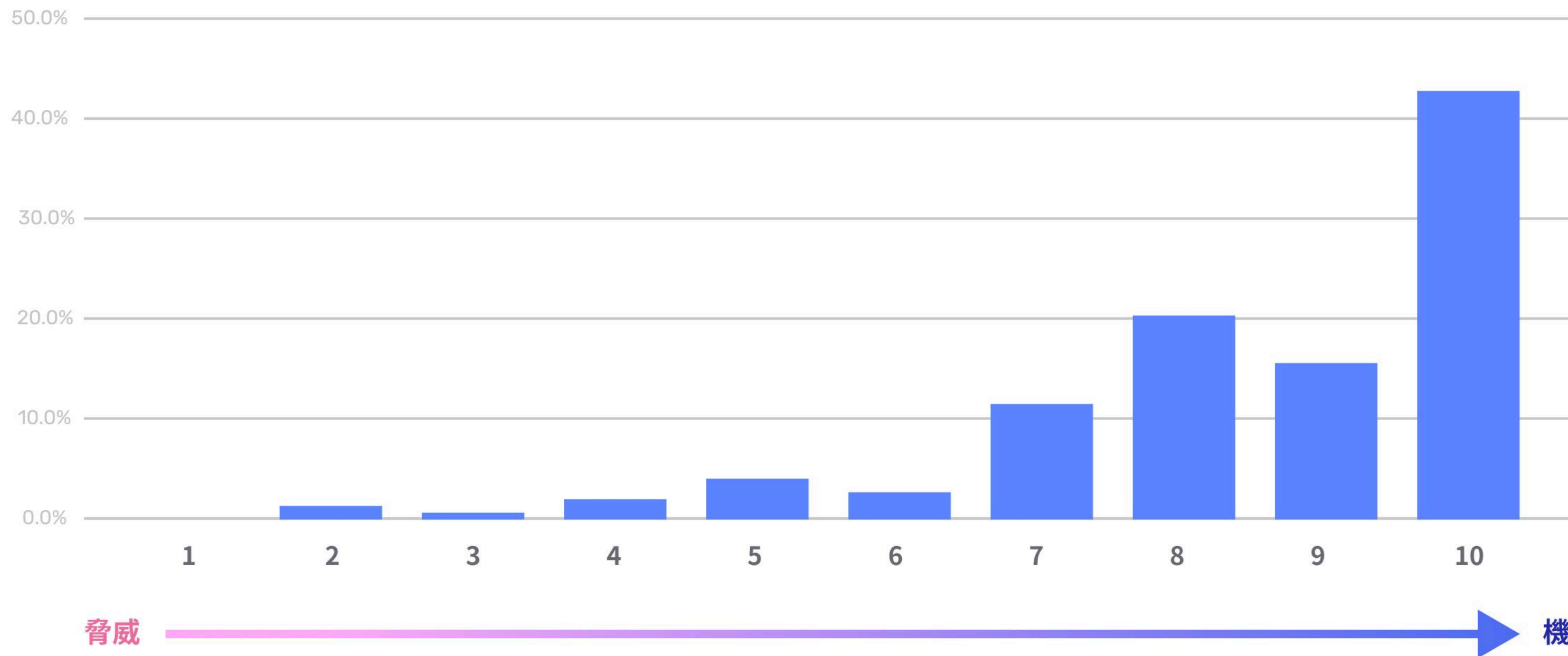
設問

自社の「エンジニアリング部門」におけるAI活用度について、感覚として最も当てはまるものを1つお選びください。  
(※比較対象は日本国内の企業を想定して回答ください)



今回の回答企業においては、AIを「脅威」ではなく「機会」と前向きに捉える企業が多く、この点も一定回答の偏りに繋がりを点も予めご留意ください。

**設問** 貴社のビジネス全般にとって、AI技術の進化・普及を「機会・脅威」のどちらとして捉えていますか？ 10段階で評価してください。



# 01 企業のAI駆動開発の実態

## コーディング用AIツールの利用率では Claude Codeが圧倒的。 回答企業の6割以上で「全てのエンジニアが利用可能」な環境が整えられている。

**設問** 以下のコーディング業務に用いられるAIツールについて、貴社の開発組織における公式の導入・活用状況についてお選びください。

	公式に使っている			公式には使っていない			
	使っている (合計)	使っている (全エンジニアが 利用可能)	使っている (一部のエンジニア や部門で利用)	個人での利用は 認めている	使っていたが やめた	今後導入予定	活用していない
Claude Code	91.1%	61.1%	29.9%	2.5%	0.0%	5.1%	1.3%
Cursor	73.9%	33.8%	40.1%	8.3%	6.4%	0.0%	11.5%
GitHub Copilot	70.1%	42.7%	27.4%	4.5%	15.3%	0.6%	9.6%
Codex	61.8%	22.9%	38.9%	7.0%	0.6%	5.1%	25.5%
Devin	54.1%	29.3%	24.8%	7.0%	14.0%	2.5%	22.3%
Gemini CLI	47.1%	17.2%	29.9%	10.2%	2.5%	3.2%	36.9%
Code Rabbit	24.8%	13.4%	11.5%	9.6%	8.9%	3.2%	53.5%
AWS Kiro	19.7%	2.5%	17.2%	17.2%	3.2%	1.9%	58.0%
Antigravity	17.2%	0.6%	16.6%	19.7%	1.9%	8.9%	52.2%
Cline	14.6%	3.8%	10.8%	12.1%	15.9%	1.3%	56.1%
Microsoft Copilot	14.0%	4.5%	9.6%	8.3%	3.2%	0.0%	74.5%

過去に実施した別調査において、企業の規模や属性によって利用するAIツールは大きく異なっていた。前頁の結果は今回の回答企業での傾向である点は留意が必要。

参考

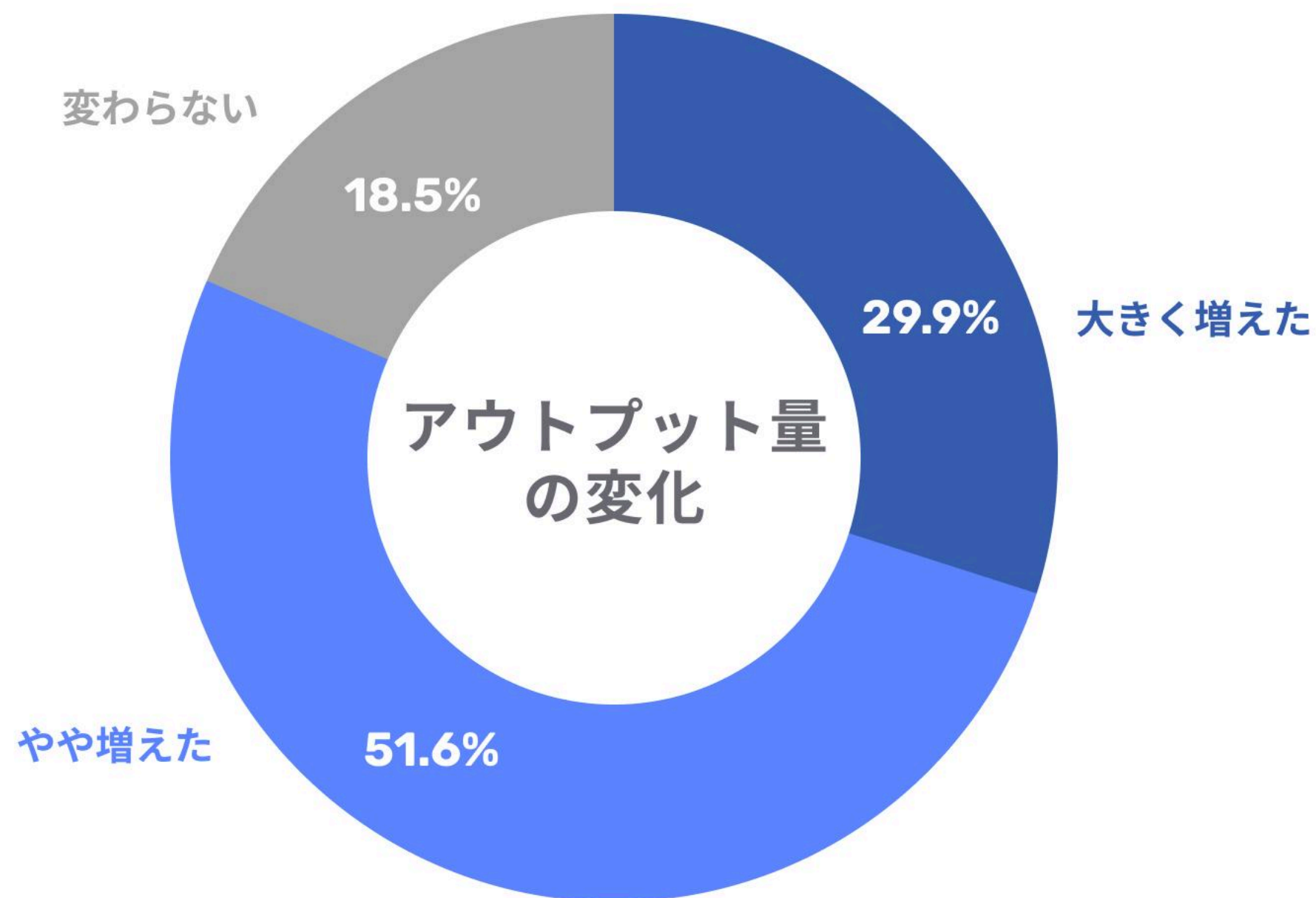
2025年11月に「エンジニア個人」を対象に行なった調査結果（最も利用頻度が高いツール）

	所属している企業規模					
	メガベンチャー	スタートアップ	大企業 / グループ会社	Sier / SES	その他企業 (中小企業など)	フリーランス
Claude Code	41.4%	40.2%	19.5%	19.0 %	17.5%	25.5%
GitHub Copilot	24.3%	19.7%	35.8%	22.4 %	28.8%	32.7%
Microsoft Copilot	4.3%	1.6%	22.8%	32.8%	22.5%	10.9%
Cursor	21.4%	22.0%	8.9%	8.6%	15.0%	9.1%
Gemini CLI	4.3%	3.1%	3.3%	6.9%	7.5%	12.7%
Codex	2.9%	4.7%	1.6%	5.2%	2.5%	5.5%
Devin	0.0%	3.9%	2.4%	0.0%	1.3%	0.0%
その他	1.4%	4.7%	5.7%	5.2%	5.0%	3.6%

※上記は2025年12月公開「AIによるエンジニアの変化の実態と、転職・キャリア選択の現状」レポートにて参照いただけます。

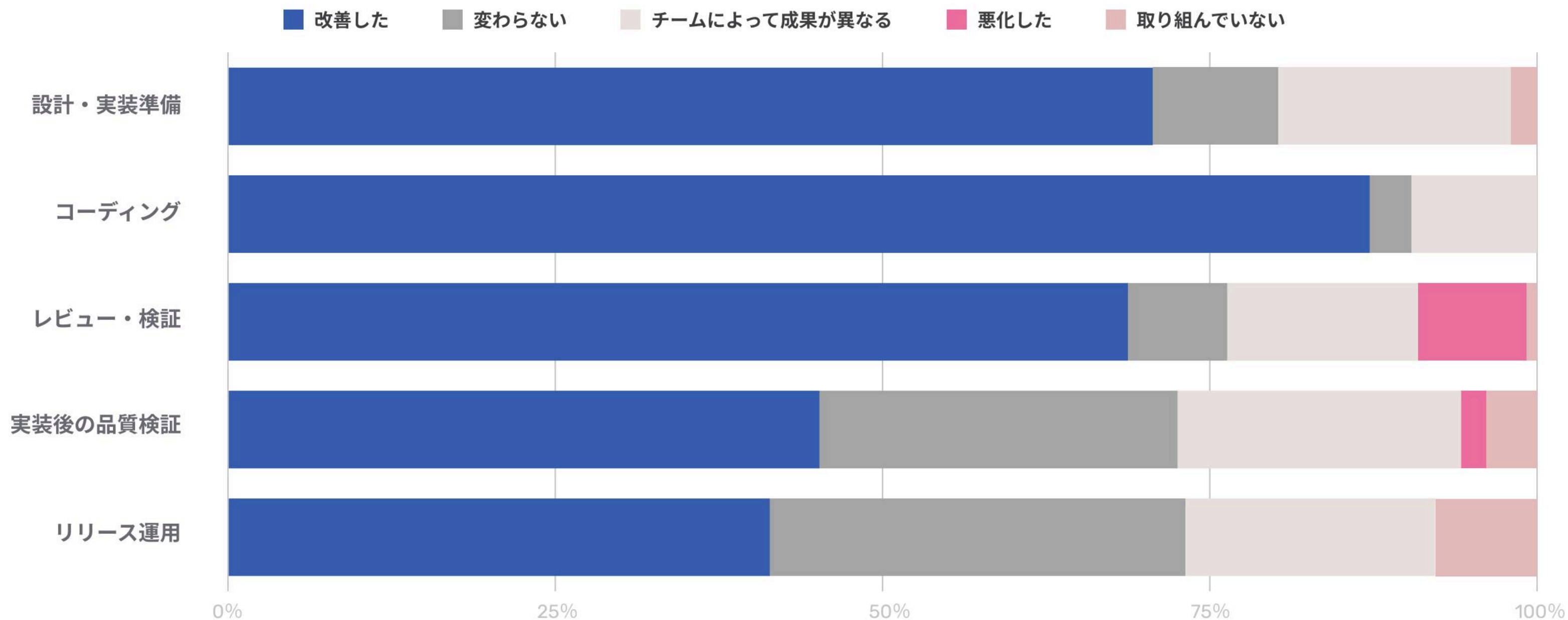
AIの普及により「アウトプット量が減った」という企業は1社もなく、8割以上の企業がデプロイ頻度やリリース件数が増加したと回答している。

**設問** 貴社の開発部門におけるAI活用の結果、最終的なアウトプット量（例：デプロイ頻度、リリース件数）に変化はありましたか？



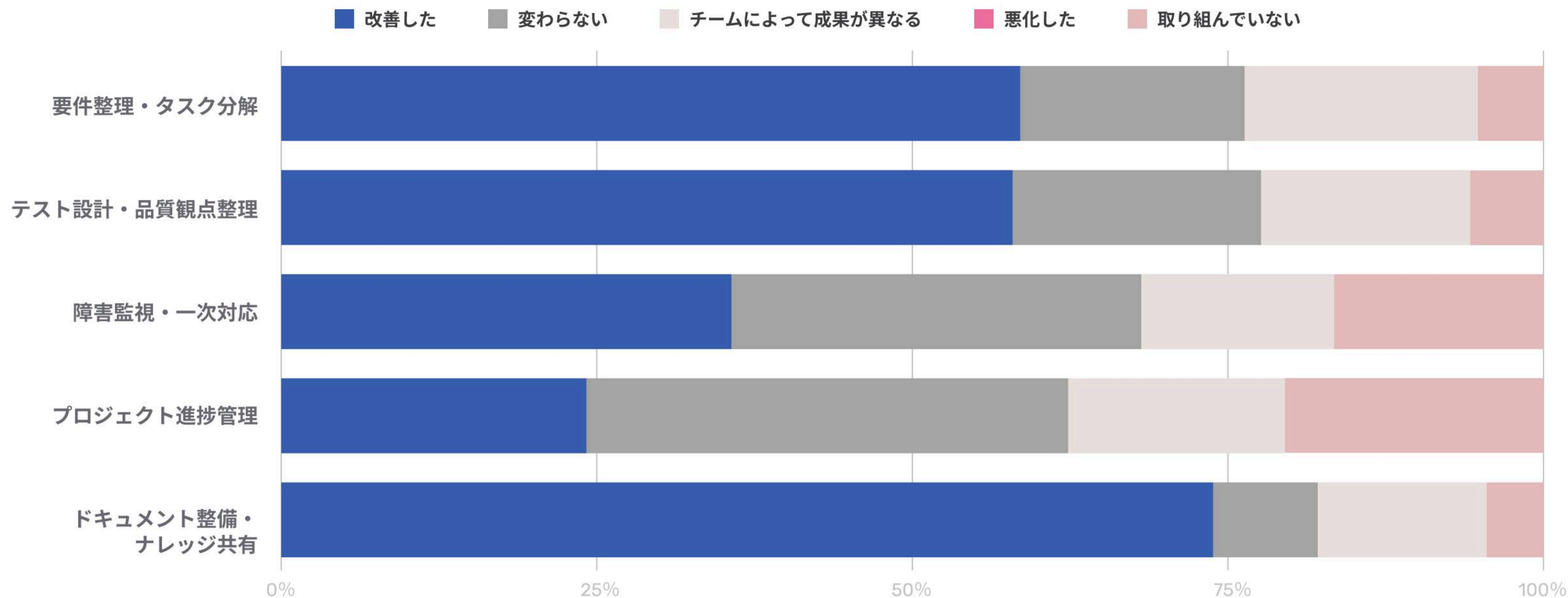
AIによる恩恵が最も強いのは「コーディング」の領域。「レビュー・検証」も約7割が「改善した」と回答している反面、「品質保証」や「運用」の改善実感はまだ少ない。

設問 貴社におけるAI活用の結果、以下の各開発工程はどのように変化しましたか。最も近いものをお選びください。



「ドキュメント整理」や「要件整理」などがAIで改善している一方、「障害監視」や「進捗管理」などについては効果を実感している組織は少ない。

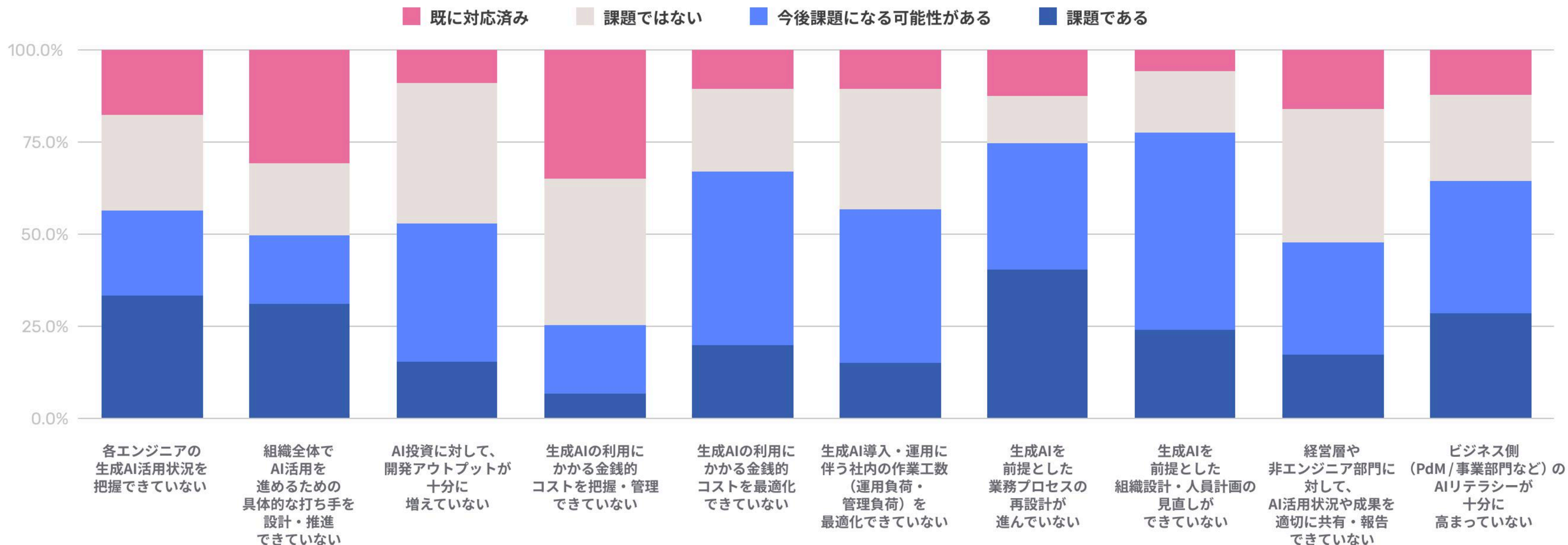
設問 貴社におけるAI活用の結果、以下の各業務はどのように変化しましたか。最も近いものをお選びください。



直近は「業務プロセスの再設計」や「個々のAI活用状況の把握」が課題となっている。  
将来的には「組織設計・人員計画」や「コストの適正化」が課題になるという回答が多い。

設問

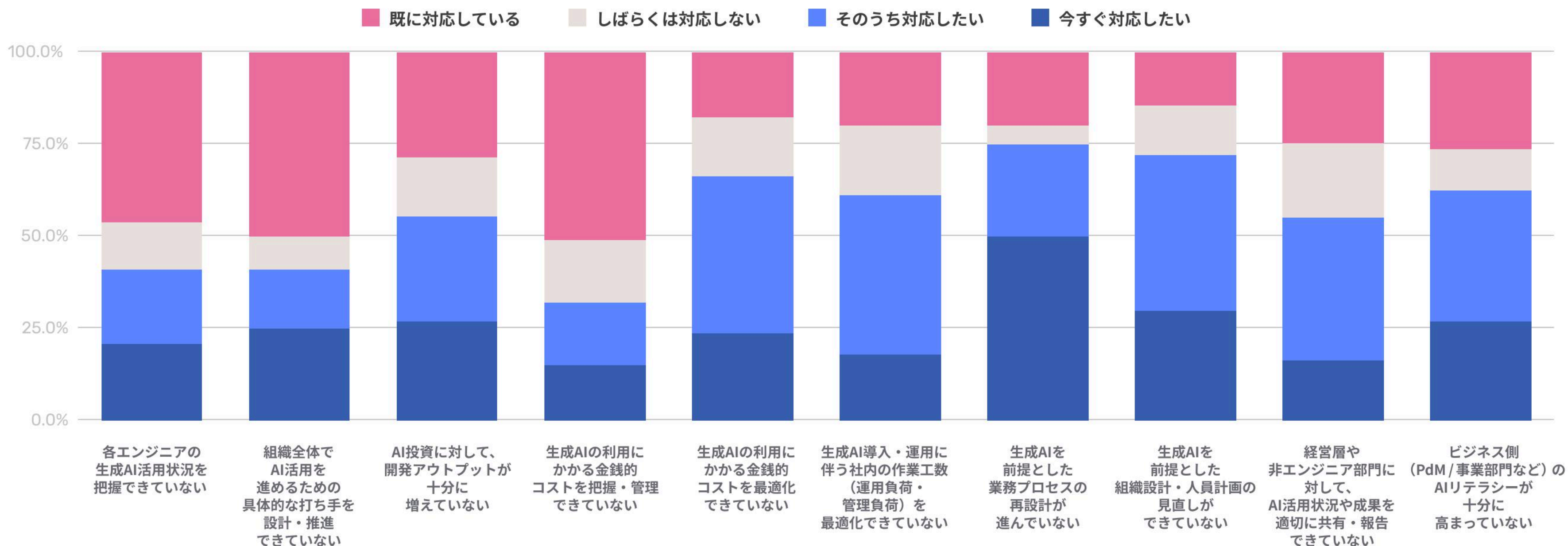
貴社の開発部門におけるAI活用において、以下の事項がどの程度「課題」になっているか、選択肢ごとにそれぞれ最も当てはまるもの一つお選びください。



対応の優先度で見ても、足元は「業務プロセスの再設計」の対応を急ぐ企業が多い。「組織全体の活用推進」や「コストの把握」など対応済みの項目も半数程度見られる。

設問

貴社の開発部門におけるAI活用において、以下の事項の対応優先度について、選択肢ごとにそれぞれ最も当てはまるものをお選びください。



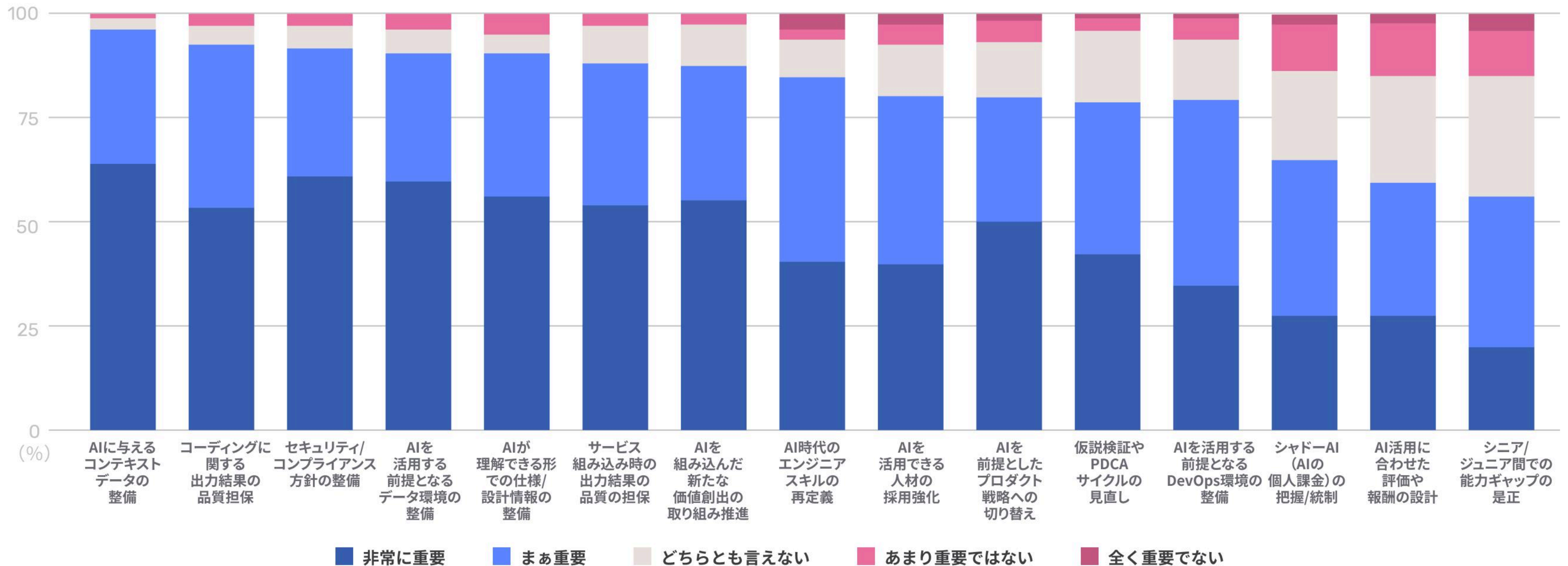
(参考) 前2項目をクロス集計し、それぞれの項目ごとに回答が多かったTop3の項目を並べると以下のようになる。

	最も多かった回答		次に多かった回答		3番目に多かった回答	
	回答セグメント	割合	回答セグメント	割合	回答セグメント	割合
個々人のAI活用状況の把握	既に対応が完了している	17.3%	課題であり、今すぐ対応したい	16.0%	既に対応が完了しており、課題ではない	12.2%
組織全体でAIを活用する設計・企画	既に対応が完了している	26.9%	課題であり、今すぐ対応したい	17.9%	既に対応が完了しており、課題ではない	10.3%
AI投資に対するアウトプットの少なさ	今後課題になる可能性があるので、そのうち対応する	15.4%	既に対応が完了しており、課題ではない	14.7%	今後課題になる可能性があるので、今すぐ対応したい	13.5%
AIにかかる金銭コストの把握・管理	既に対応が完了している	27.6%	既に対応が完了しており、課題ではない	21.2%	課題でないため、しばらく対応しない	12.2%
AIにかかる金銭コストの最適化	今後課題になる可能性があるので、そのうち対応する	30.1%	課題であり、今すぐ対応したい	13.5%	既に対応が完了している	9.0%
AI導入・運用に係る作業工数の最適化	今後課題になる可能性があるので、そのうち対応する	22.4%	課題ではないが、そのうち対応したい	12.8%	課題でないため、しばらく対応しない	10.3%
AIを前提とした業務プロセスの再設計	課題であり、今すぐ対応したい	30.1%	今後課題になる可能性があるので、今すぐ対応したい	16.0%	今後課題になる可能性があるので、そのうち対応する	14.7%
AIを前提とした組織・人員計画の見直し	今後課題になる可能性があるので、そのうち対応する	27.6%	今後課題になる可能性があるので、今すぐ対応したい	16.0%	課題であり、今すぐ対応したい	13.5%
経営層や非開発職への成果共有・説明	今後課題になる可能性があるので、そのうち対応する	18.6%	課題でないため、しばらく対応しない	14.1%	既に対応が完了している	12.8%
ビジネス側のAIリテラシーの向上	今後課題になる可能性があるので、そのうち対応する	22.4%	課題であり、今すぐ対応したい	16.7%	既に対応が完了している	10.3%

## 重要テーマとしては「コンテキストデータの整備」や「データ環境の整備」などAIの価値を最大化するための情報整備を重要視している企業が多い。

設問

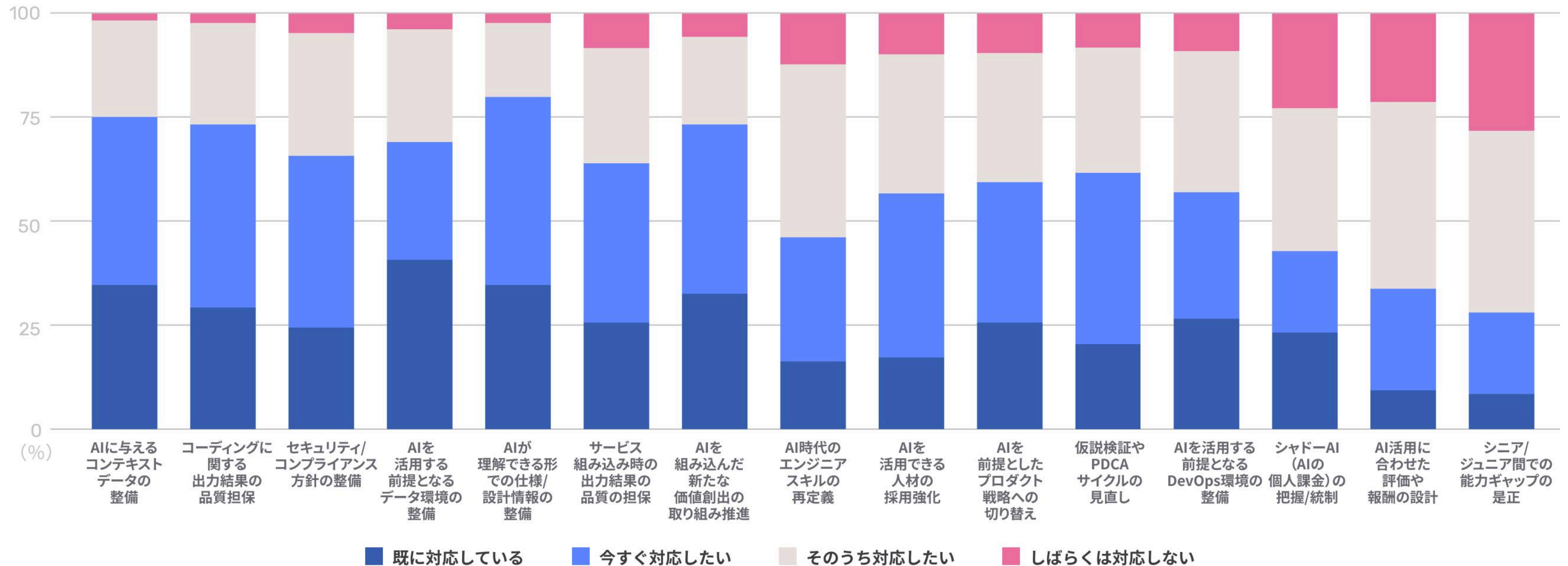
貴社の開発部門におけるAI活用において、以下の事項の「重要度」について、選択肢ごとにそれぞれ最も当てはまるものをお選びください。



前頁で「重要」という回答が50%を越えている項目でも、「既に対応している」企業の比率は総じて低く、多くの企業が環境整備の途上であることが伺える。

設問

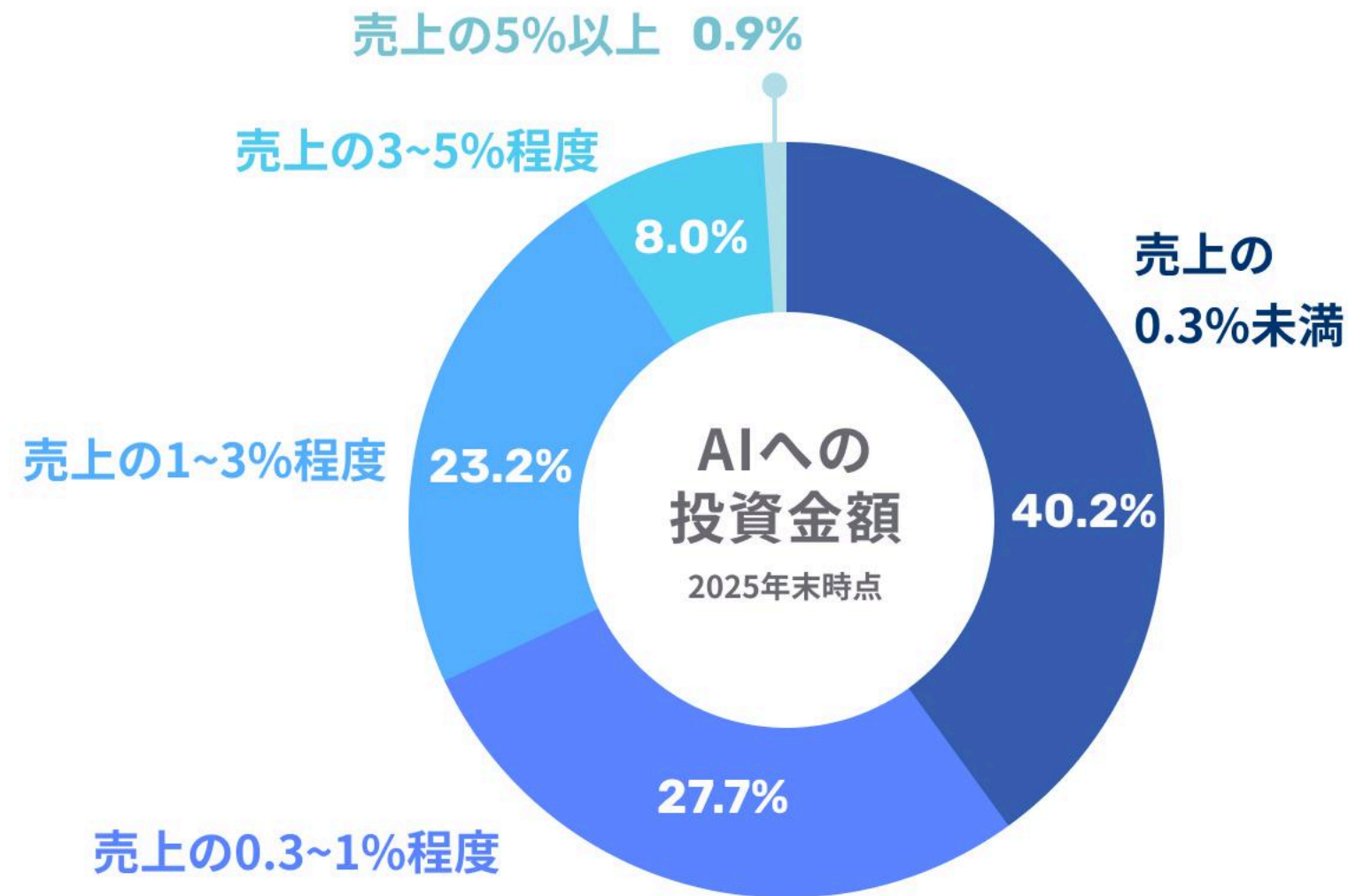
貴社の開発部門におけるAI活用において、以下の事項の「対応進捗度」について、選択肢ごとにそれぞれ最も当てはまるものをお選びください。



今回の調査対象企業においては売上の3%程度までを上限としてAI投資を行う企業が多い。  
また、2026年度については7割以上の企業が予算を「増額する」と回答している。

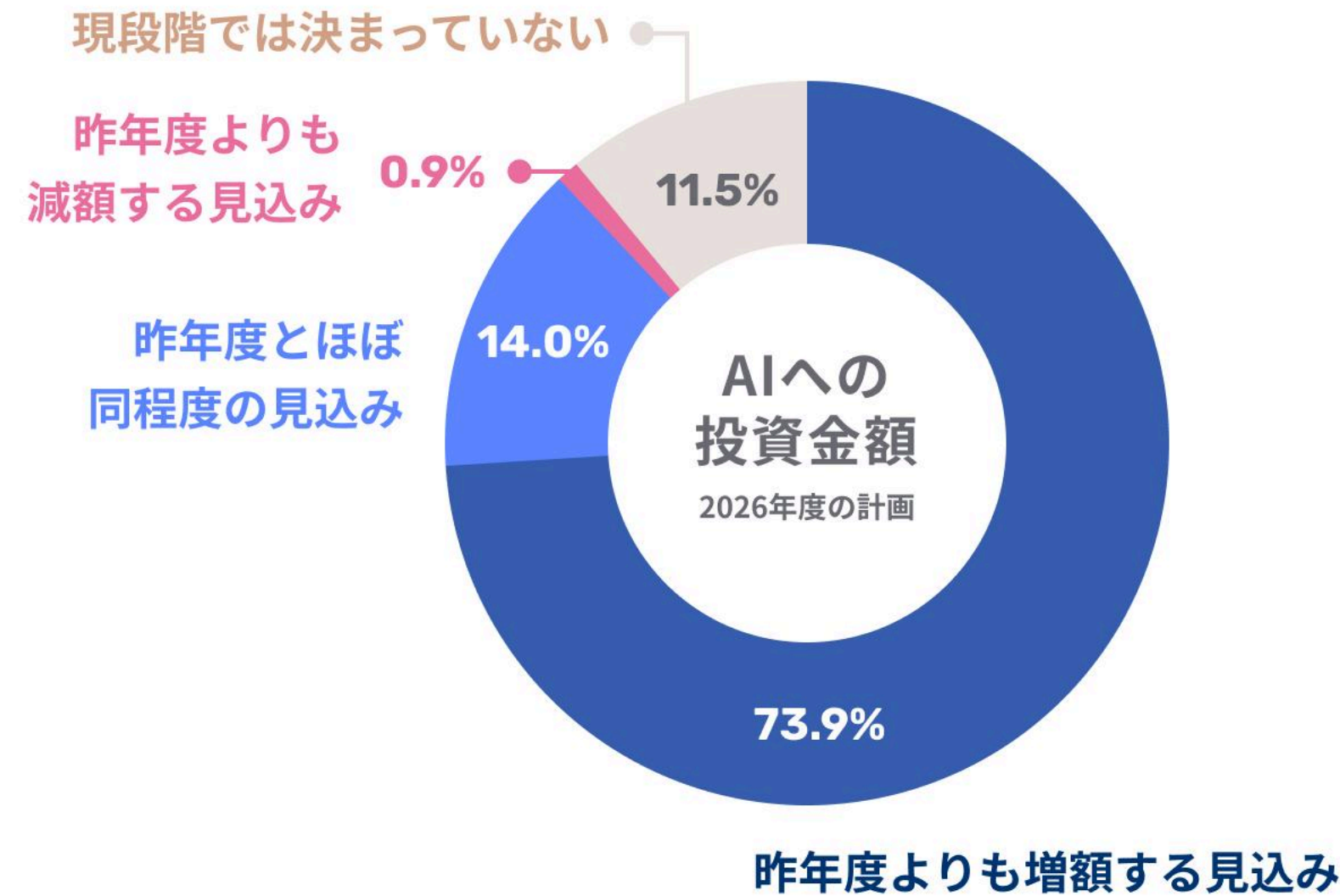
設問

2025年末時点での貴社での「AIへの投資金額（予算額）」について、最も当てはまるものを1つ選んで回答ください。



設問

「AIへの投資金額（予算額）」について、2026年度の計画をお教えてください。



※ 「分からない」と答えた回答を除く n=112件のうちの割合

## 予算増額の理由を大別すると、①利用者の拡大、②消費トークン量の増大、③ツール側の利用料の値上がり、のいずれかを理由として挙げられるケースが多い。

**設問** 2026年度の「AIへの投資金額（予算額）」について、お教えいただける範囲でその用途や増減の理由・背景などをお教えてください。

### 増額する計画の企業の声 ※全て原文ママ

利用の実態として各開発チームでの導入が進んでいるため。特にClaudeは利用するメンバーやチームが増えており、右肩上がりに利用費が増えている状況にあり、それを見越して予算を設定しています。

GitHub CopilotやDevinなどのCoding AIツールの拡充、LLM APIの活用基盤整備、AI活用に向けたCI/CD環境の整備などを目的として増額予定。開発生産性のさらなる向上とAI drivenな開発体制の確立を加速させる。

エンジニアはほぼ100%活用しておりプロダクト導入も進んでおり、売上にも強く影響する開発体制や機能にとってAIがポイントになっている事は社内でも合意している。加えて、ツールや外貨高騰につき毎年増額傾向にあるため、来年度も継続して投資する。

業務フロー、開発フローを全体的にAIネイティブにするにあたり、消費トークン量をKPIとして定めるため。

エンジニアの人件費を一部AIへの投資に置き換える予定です。AIの進歩により以前よりもコードを書く役割のエンジニアの必要数が減ったためその分の予算をAIに投資します。具体的には、コーディング、仕様作成、デザインなどをAIにまかせていくつもりです。

業務委託エンジニアへのAIエージェントツールの付与。背景として、社内エンジニアでAI活用により効率が十分見込めることが判断できたため。生産性向上とコードレビュー負担減のため。

エンジニアについてはすでにある程度不自由なく利用出来る段階まで導入完了しているが、非エンジニアに向けて今後AIツールの利用が増える見込み。

## 昨年までの「様々なツールを試す」というフェーズは終わりつつあることが、「増額しない」という意思決定をした企業のコメントから読みとれる。

**設問** 2026年度の「AIへの投資金額（予算額）」について、お教えいただける範囲でその用途や増減の理由・背景などをお教えてください。

### 昨年同等 または 減額を計画している企業の声 ※全て原文ママ

API費用、研修費用、各種AIサービスのサブスクリプション料、VercelやSupabaseなどAIと相性の良いBaas関連への投資は続ける。一方で、AIを一般化してきたため、これまでのような様々なAIプロダクトを検証のために契約するフェーズは終わりつつあると考えている。

エンジニア全員に導入しているツールは人数増加に伴い増える。一方で検証的に契約しているライセンスなどは見直しにより削減するが、その分はよりROIが高いと判断されたツールへの投資に回すため。

昨年度に既に各種AIツールや全社的にAIを利用できる制度を導入済みで、すでに予算として一定の金額を割いており、今期もそれを継続していくため。

昨年度から十分予算をかけているところなので、人数増による多少の変化はあると思うが、今年も同程度の見込み。

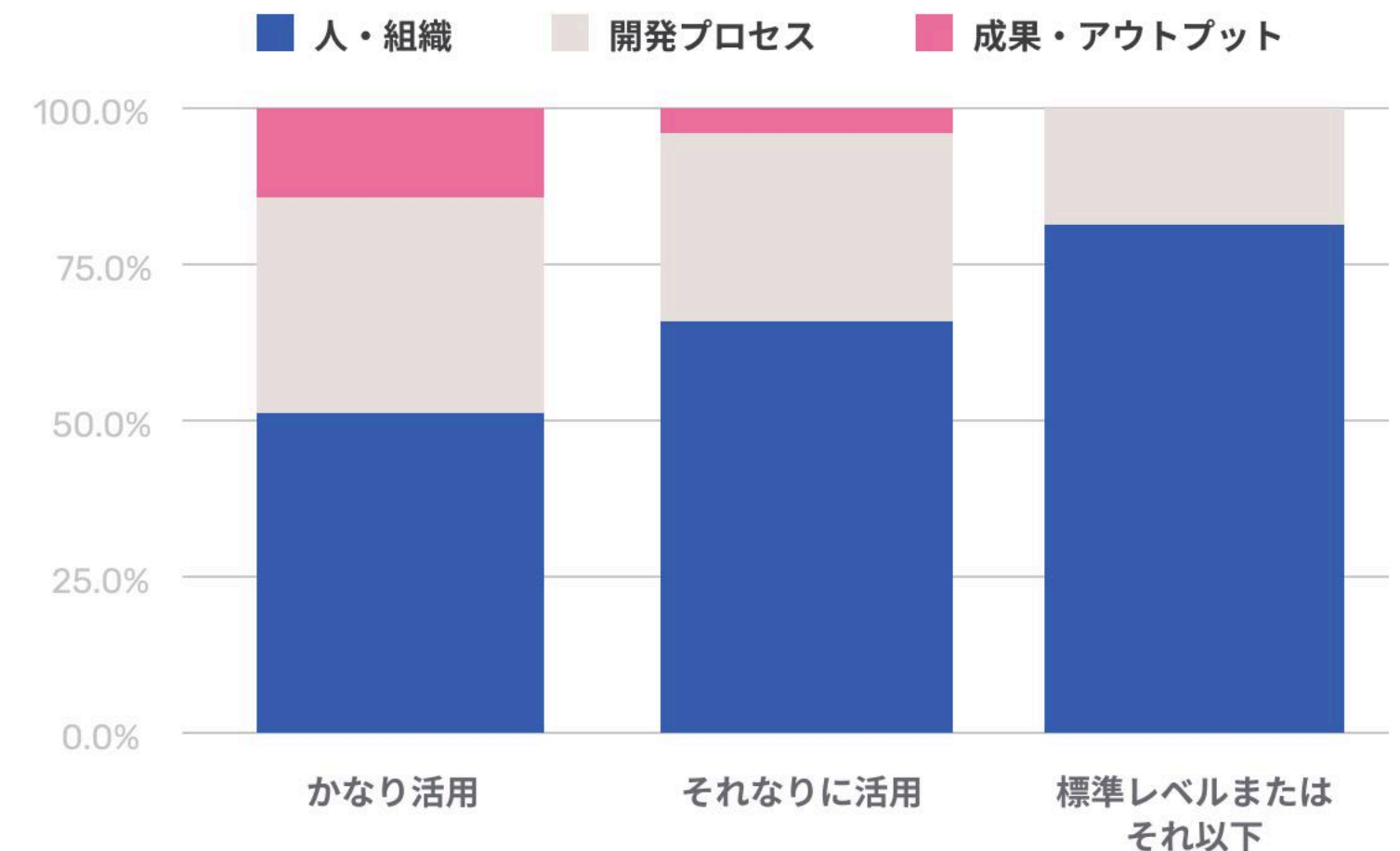
ツールとしてはほぼ揃った。

企業のマネージャーの関心は、現状「人や組織」に関するテーマが多い。  
 ただし、AI活用が積極的な企業ほど「成果やアウトカム」の増大にベクトルを向ける傾向。

**設問** AI時代の開発組織を運営していく上で、直近で特に力を入れていることや気を配っていることがあれば教えてください。

大テーマ	小テーマ	回答に占める割合
人や組織に関するテーマ	人材育成・組織内での平準化	22.4%
	AI活用のための環境整備	15.0%
	AIの活用推進	13.1%
	AI時代の開発組織設計	12.1%
開発プロセスに関するテーマ	開発プロセス全般	13.1%
	技術選定・設計・データ整備等	6.5%
	品質保証や安全性の担保	6.5%
	エンジニアの意識づけ	3.7%
成果やアウトプットの質に関するテーマ		13.1%

P.7「自社のAI活用度」の回答ごとに見た  
 左表・大テーマの回答率



※左表は自由回答の記述内容をFindyにて分類・集計したものです。  
 ※同一企業の回答に複数の要素が含まれる場合は、それぞれカウントしています。

## 参考) 組織運営上、「人や組織」に対して注力されていること

**設問** AI時代の開発組織を運営していく上で、直近で特に力を入れていることや気を配っていることがあれば教えてください。

人材育成・平準化	AIコーディングエージェントの活用方法をエンジニアのレベルにより制限している。ジュニアは自身の成長のために用い、シニアはアウトプットのスピードアップのため。
	Claude Codeの使い方の共有会などを行い、なるべくノウハウの差が起きないようにしている。
	どういう指示を出す必要があるのか、指示出しは人がやるのかAIがやるのか、という実例をPRやそのPR作成過程を公開することによる知識共有。また、自身のAIとの会話など仕事とは関係ない内容でもシェアすることによる心理的ハードルの除去。
環境整備	利用できるAIサービス・モデルを増やし続ける動き。セキュリティとの兼ね合いはありますが選択肢を多く取り揃えることが重要と思っています。
	組織的にこの分野の大事さが伝わっていない役員などがいるので、まずはそこや、データが整っている・データに関する活動やデジタル戦略の対応力。
活用推進	「AIを推進していくぞ」というモメンタム（または「やらないとやばい」という適度な焦燥感）作り。
	AI活用をリードできる存在を支援し、取り組みを可視化、より成果を出しやすい環境の整備。
開発組織設計	ユーザを見るという志向性をエンジニアが持っているか、PdMの方もエンジニアや運用とうまく会話できるかということにかなり重視して見えています。
	意識づけ。エンジニアの仕事は他の人（ユーザーであったり事業部の同僚であったり）の問題のを解決することで、その解決にAIをうまく使ってほしい。自分個人の生産性も大事だがチームや部門、など全体の生産性向上に向けた行動をとってほしい、という方向づけ。

※全て原文ママ

## 参考) 組織運営上、「開発プロセス」に対して注力されていること

**設問** AI時代の開発組織を運営していく上で、直近で特に力を入れていることや気を配っていることがあれば教えてください。

開発プロセス全般	ボトルネックになっているプロセスでAIを活用したり、開発業務以外のためのAIエージェント開発等を行い、生産性を高めていきたい。
	AI Nativeな思想・フロー・手法を全行程に組み込み、エンジニアが好きな工程だけを主導し、楽しめる現場作り。
技術選定・設計・データ整備等	AIが提案したコードそのままではなく、適切なアーキテクチャが検討されているかどうか。
	プロジェクト計画書や要件定義書などの上流工程のコンテキスト整備。
	Issue単位で、AIで作る作らないを予め決めている。
品質保証や安全性の担保	ナレッジの共有、セキュリティのガードレールのアップデート。
	AIが生成したコードの品質担保プロセスの整備(レビュー基準の見直し)。
	プロダクト品質についての考え方や、目指す体験と受け入れ基準の間の抽象度のGAPを段階的に下げる。気にせずに行くと、ビジネス目線の抽象度だと高すぎるため、エンジニアとビジネス間のコミュニケーションがかけ違いになってしまう。
エンジニアの意識づけ	今までのやり方にこだわらないこと、時にはエンジニアとしてのプライドを捨てAIにベットすること。
	AIに助力はもらうが頭ごなしに信用するなということを大事にしている。

※全て原文ママ

## 参考) 組織運営上、「成果やアウトプットの質」に対して注力されていること

**設問** AI時代の開発組織を運営していく上で、直近で特に力を入れていることや気を配っていることがあれば教えてください。

AIによって手数が増えた分、やる施策をちゃんと考えるようにしている。無駄な機能を作っていないわけではないということ。数年かかってしまっていたことをこれからは数時間でできる可能性が出てきたので、どちらかというところちに注力していきたい。

これまで、アウトプットや成果を重視して組織やメンバーの評価を行ってきたが、AI時代にもその観点は引き続き重要であると考えています。AI活用も含めた上で開発に使った時間や金銭的なコストに対して、妥当な成果を出しているかどうかを検証する仕組みや可視化する機構を作ることに力を入れ、良いやり方でAIを使い成果を最大化することが評価される、といった構造を作りたい。

個人が思う限界以上の要求を投げかけ続ける。(ex. 開発生産性なら2,3倍じゃなくて、10倍、100倍を目指すように要求する)。

AIが~というよりはどのようなアウトカムを出せるか・機能のベストプラクティスを捨てる勇気(変化する勇気)を持てるかを組織全体で体現できるか(もちろん、アウトカムへの期待値はAIにより高くなる)。

各執行役員のロードマップにAIへの取り組みに対するアウトプットを強制している。

組織でのAI活用の方向性付けとして、「開発組織の広い範囲にアウトカムをもたらすものか」「スケールする活用か(スケールしない仕事を人間はやらない)」を重視して検討する。

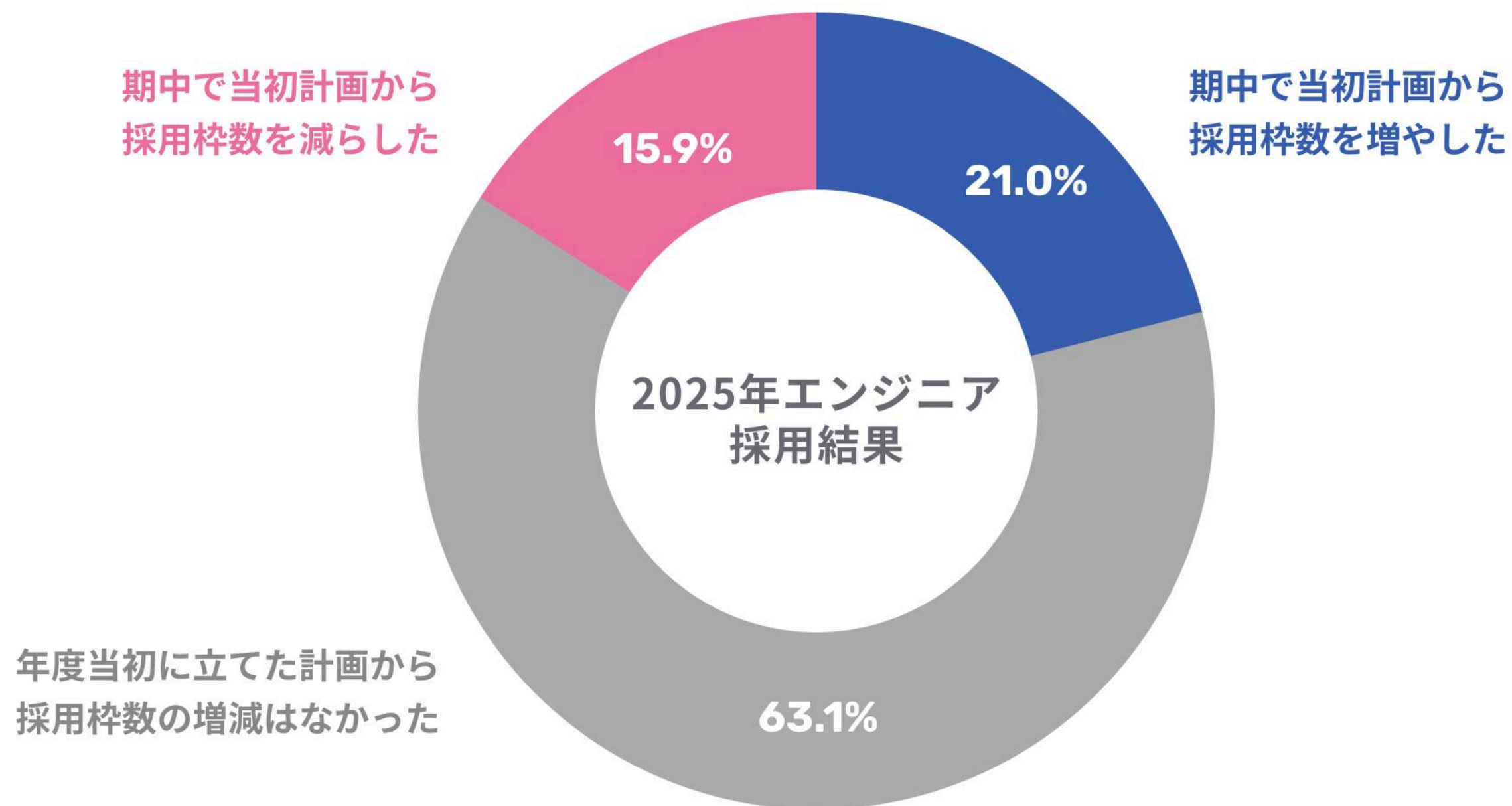
開発するエンジニアがWhy/Whatや要望の背景にあるユーザーペインなどを深く理解し、ファクトに基づいた意思決定や開発物の評価ができるようになること。開発スピードは明確に上がったので、これまで以上にこの点が重要になる。

※回答原文ママ

# 02 AIがエンジニア採用・転職 に与える影響

2025年に一部の欧米企業で「エンジニア採用の凍結」の動きも見られたが、本調査の回答企業においては、むしろ“期中に採用枠数を増やした”という企業の方が多く見られた。

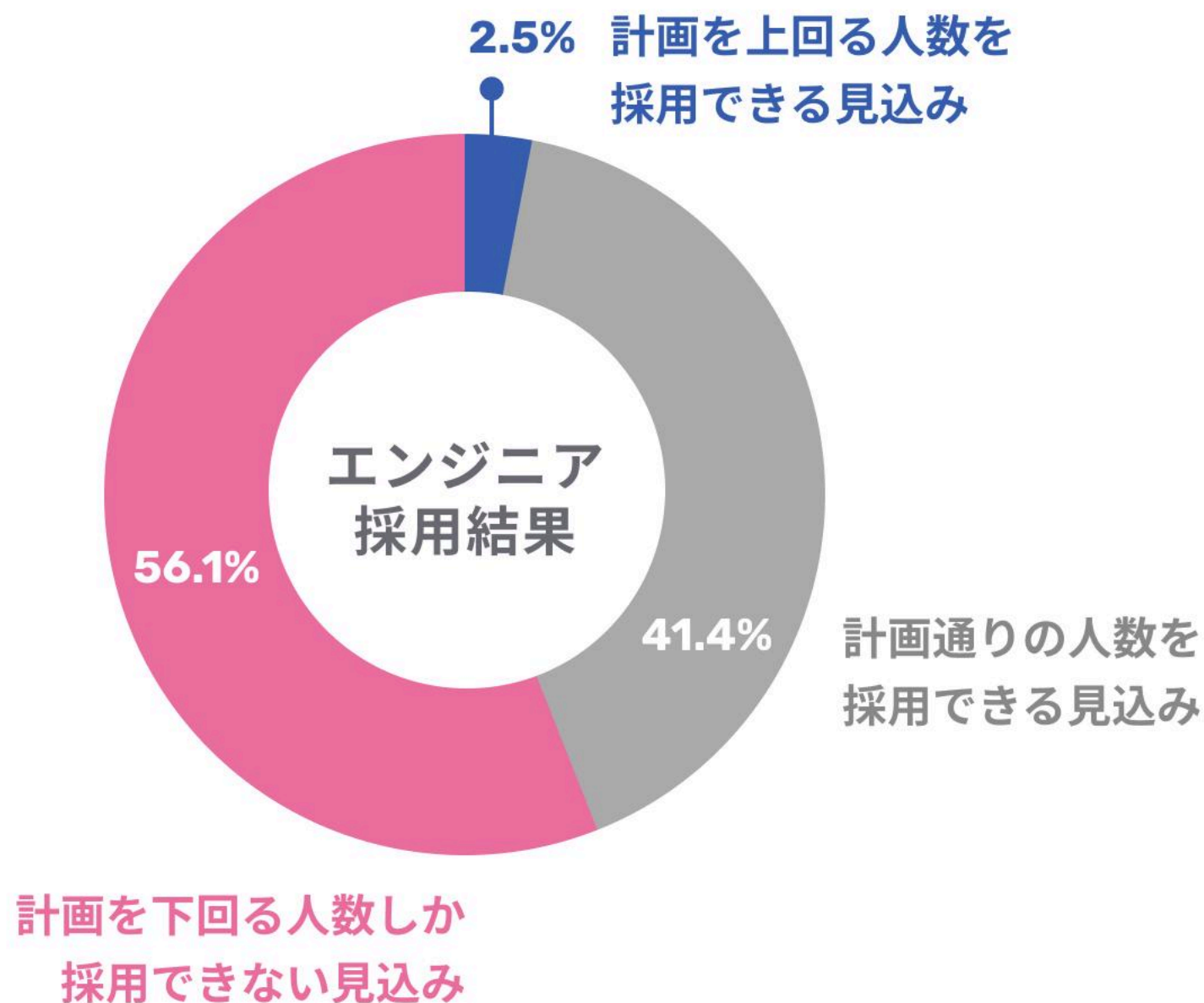
**設問** 貴社の2025年（昨年度）のエンジニア採用について、以下から最も当てはまるものを1つお選びください。



2025年計画を充足する採用数を確保できた企業はおよそ45%ほど。現時点で“充足している”と回答する企業は10%程度しかなく、企業の採用ニーズは引き続き高い。

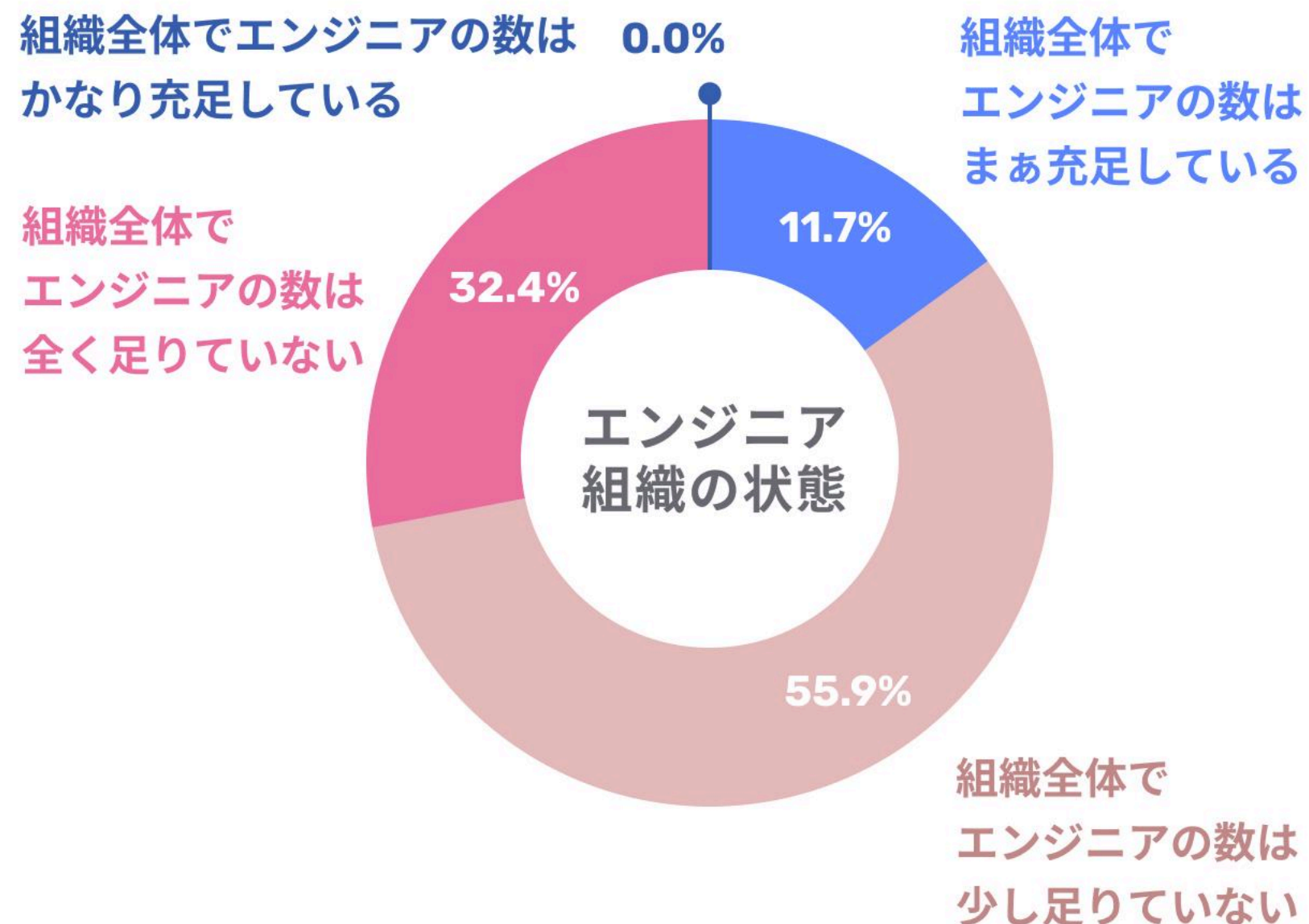
設問

2025年度のエンジニア採用の結果について、以下から最も当てはまるものを1つお選びください。



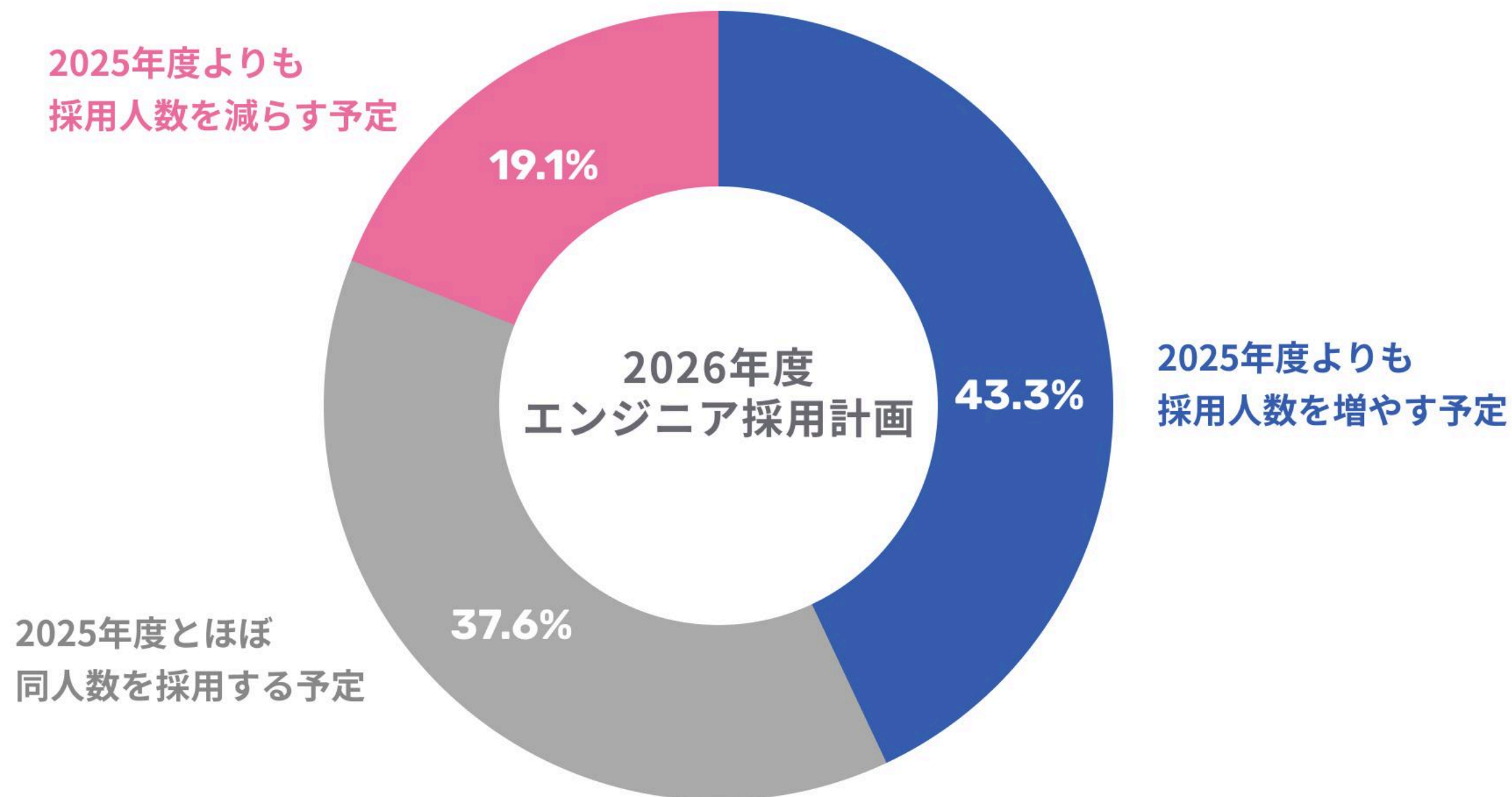
設問

現在（2026年2月）時点での自社のエンジニア組織の状態について、以下から最も当てはまるものを1つお選びください。



一部で、AIの普及により必要なエンジニアの人数が減るといった話題も出ているが、回答企業のうちの4割は「昨年度よりも採用人数を増やす予定」と回答。

設問 2026年度のエンジニア採用計画は、2025年から変更はありますか？



採用を「増やす」理由は、「事業拡大のために必要」という意見が半数以上を占める。また、エンジニアの役割が広がることで、活躍の機会が増えるという意見もあった。

設問 「2026年の採用計画の増減」の理由を、お答えいただける範囲でお教えてください。

エンジニア採用数を増やす または 昨年と同人数採用する計画の企業の声 ※回答原文ママ

事業の機会に対してエンジニアが足りていない状況が続いているため。モデリングや設計に関心があり力のあるテックリードクラスのエンジニアを採用したいが、**市場的に競争が厳しく、採用のペースよりも事業機会の広がりの方が加速している**、という状況にある。

まだまだ各領域において、プロダクト戦略に対して実装できる範囲が限られている。加えて、既存のシステムに対する改善、アーキテクチャ刷新など、プロダクト戦略に紐づかない改善施策もかなり盛りだくさんな状況。そのため、**例えエンジニアの生産性が2倍3倍になったとしても、やりたいことがなくなる**ということはずな**い状況**。また、見立てとしては特に現状の私たちのプロダクトでは、かなり巨大な歴史のあるプロダクトのため、コンテキストがかなり深くAIをフル活用した開発にはまだ課題は大きく、現状のAIによる生産性向上も、できて1.5~2倍程度と捉えている。

事業拡大、新規プロジェクト開発、組織体制の変更があり、**昨年以上に採用に力を入れる**。

エンジニアがやれることが増えていくため、よりエンジニアが必要となる。事業を伸ばしていく以上採用を止めることはない。

今期は体制変更等もあり採用を停止させた。ビジネス的に優先度の高いPBIが多く、また新規事象のためのPoCも進めたいため、**開発量を増やすための体制づくりを実現したい**。

新規プロダクトの開発に伴い人員は必要なため引き続き採用に力を入れるが、**ジュニアやAI活用ができていない人材の採用は控える方針**。

採用を減らす計画の企業については、一部で「人件費ではなくAIに投資する」といった意見が見られた他、全体的に“量”よりも“質”を重視する傾向が各企業に見られた。

**設問** 「2026年の採用計画の増減」の理由を、お答えいただける範囲でお教えてください。

採用人数を減らす計画の企業の声 ※回答原文ママ

人を増やすのではなくAIの活用を増やすことでスケールさせるべきという大前提があります。  
組織上必要なポストが埋まっていない所以外は採用は抑え気味です。

AI活用による開発生産性の向上により、一部の業務はエンジニアの増員なしで対応可能となった。一方でAI時代の中核となるシニア・ミドルエンジニアの確保は継続して重要と判断し、採用枠を絞りながら質を重視した採用にシフトしている。

AIがエンジニアの作業の大半を代替できるのと、エンジニアの仕事のあり方が再定義されていくと思うので、より汎用的なスキルを持っているエンジニアが数名いれば事足りるような想定があるので。

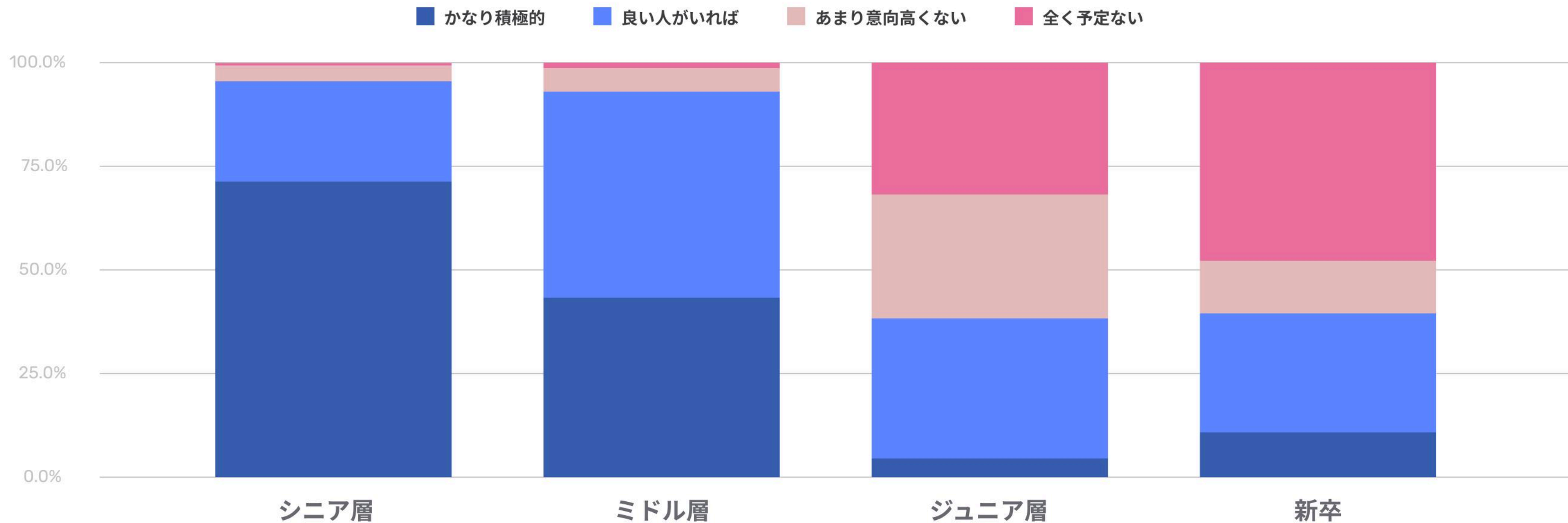
採用は進めているが、質がとても大事であると痛感しており、一定の経験や知識を持った人でないと社内で生成AIを使いこなせないと判断しているため、人数を減らし単価をあげるように考えている

AIの台頭により作業者は少し少なくなる印象です。  
ただ、キーとなる「AIを利用できる方」は今後採用も増えていく予定のため

経営層から売上に対して人員コストが高いと判断されているため採用を縮小してAIによる開発効率向上に注力する

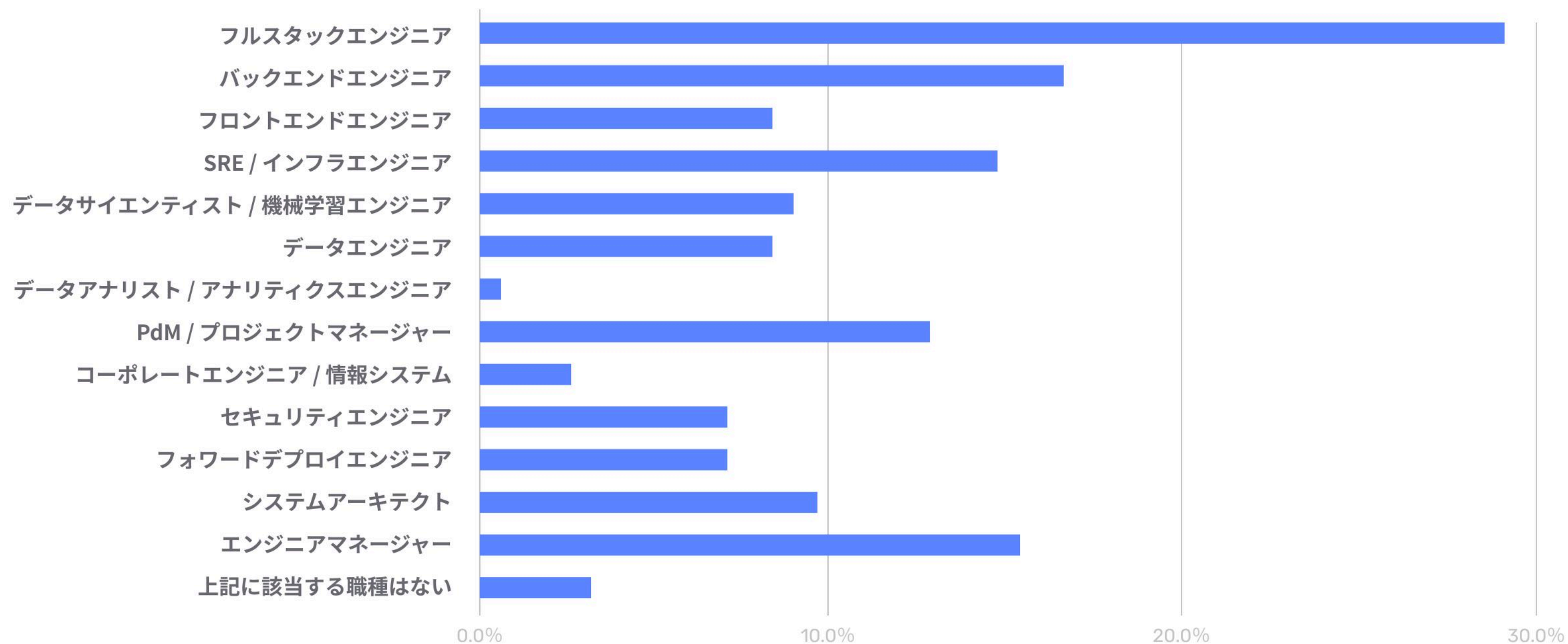
「シニア」層に対しては7割以上の企業が「積極的に採用したい」と答える反面、「ジュニア」や「新卒」の採用には慎重な姿勢を見せる企業が少なくない。

設問 2026年度のエンジニアの採用意向について、採用したいエンジニアの経験度別にお教えてください。



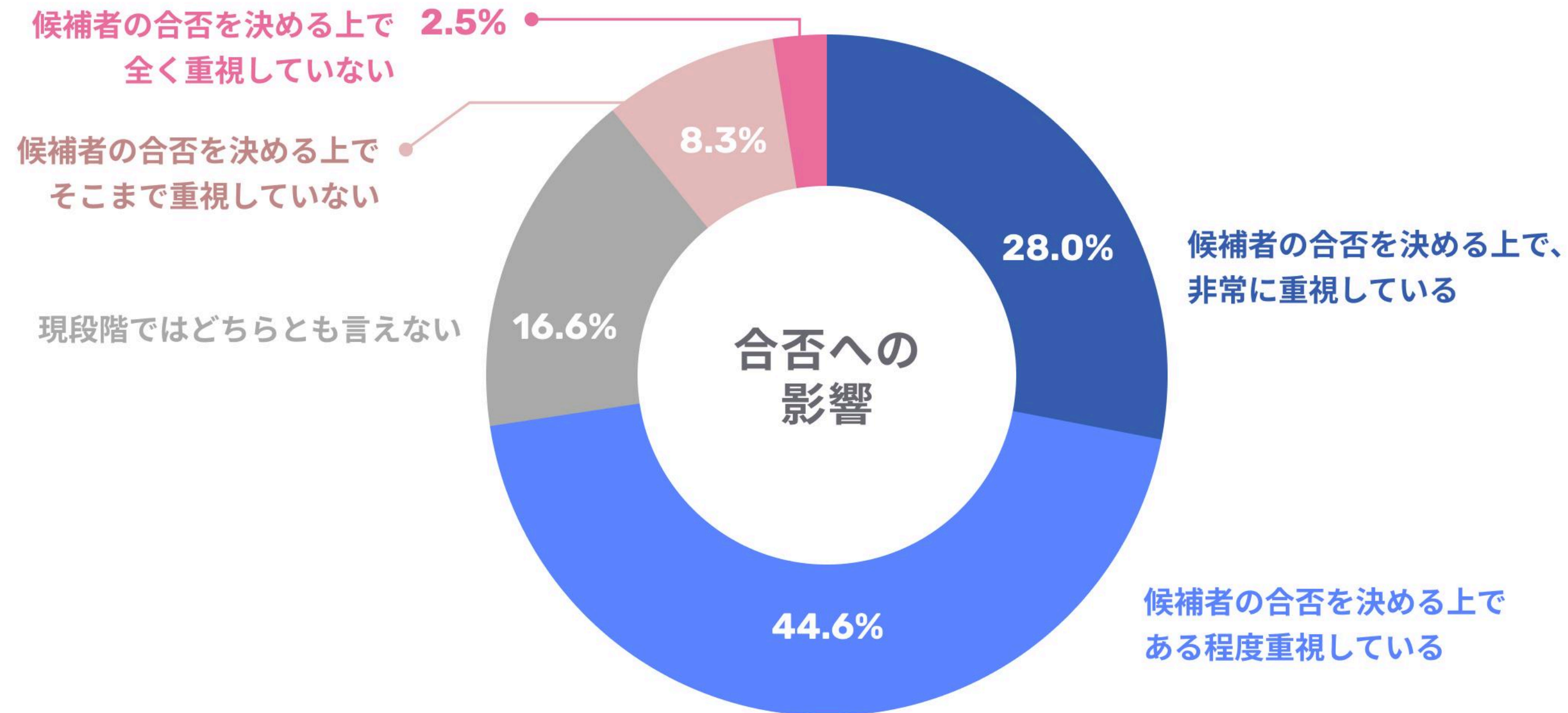
昨年に引き続き「フルスタック」エンジニアやエンジニアマネージャーの採用ニーズが高く、SRE/インフラエンジニアのニーズも相対的に高まりつつある。

設問 2026年のエンジニア採用について、特に採用優先度の高い職種を最大3つ教えてください。



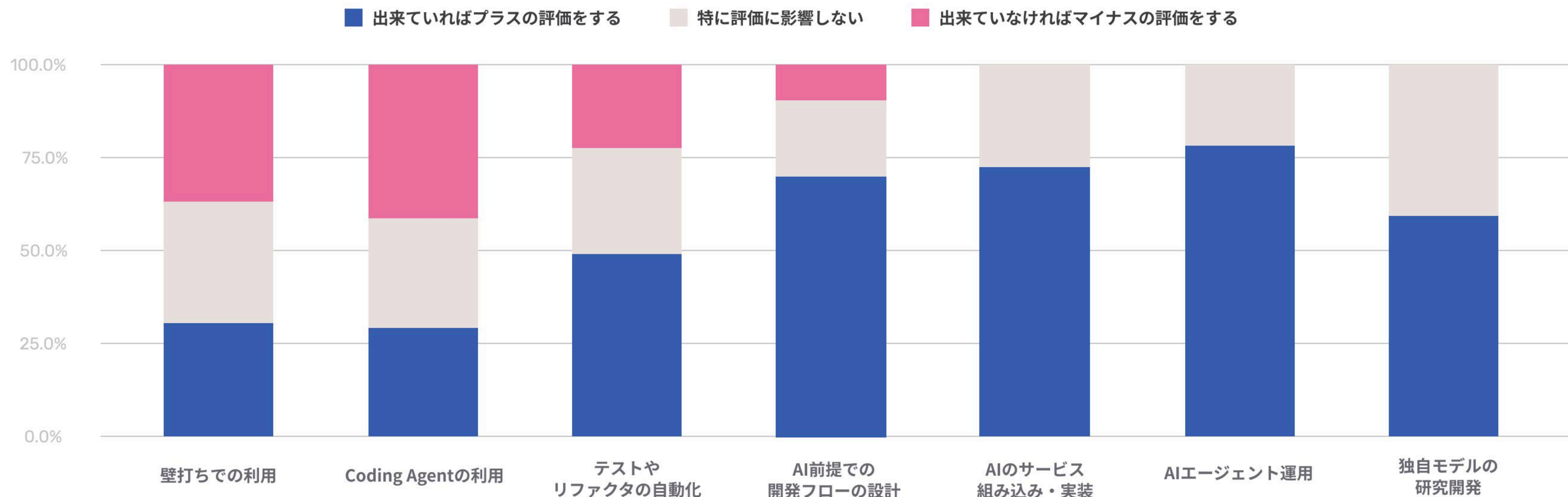
## およそ7割の企業が、エンジニアの採用プロセスにおいて「AIの活用度」を合否の基準として重視する傾向にある。

**設問** エンジニア採用プロセスにおいて候補者の「AIツールや技術の活用度合い」は選考の合否にどの程度影響しますか？



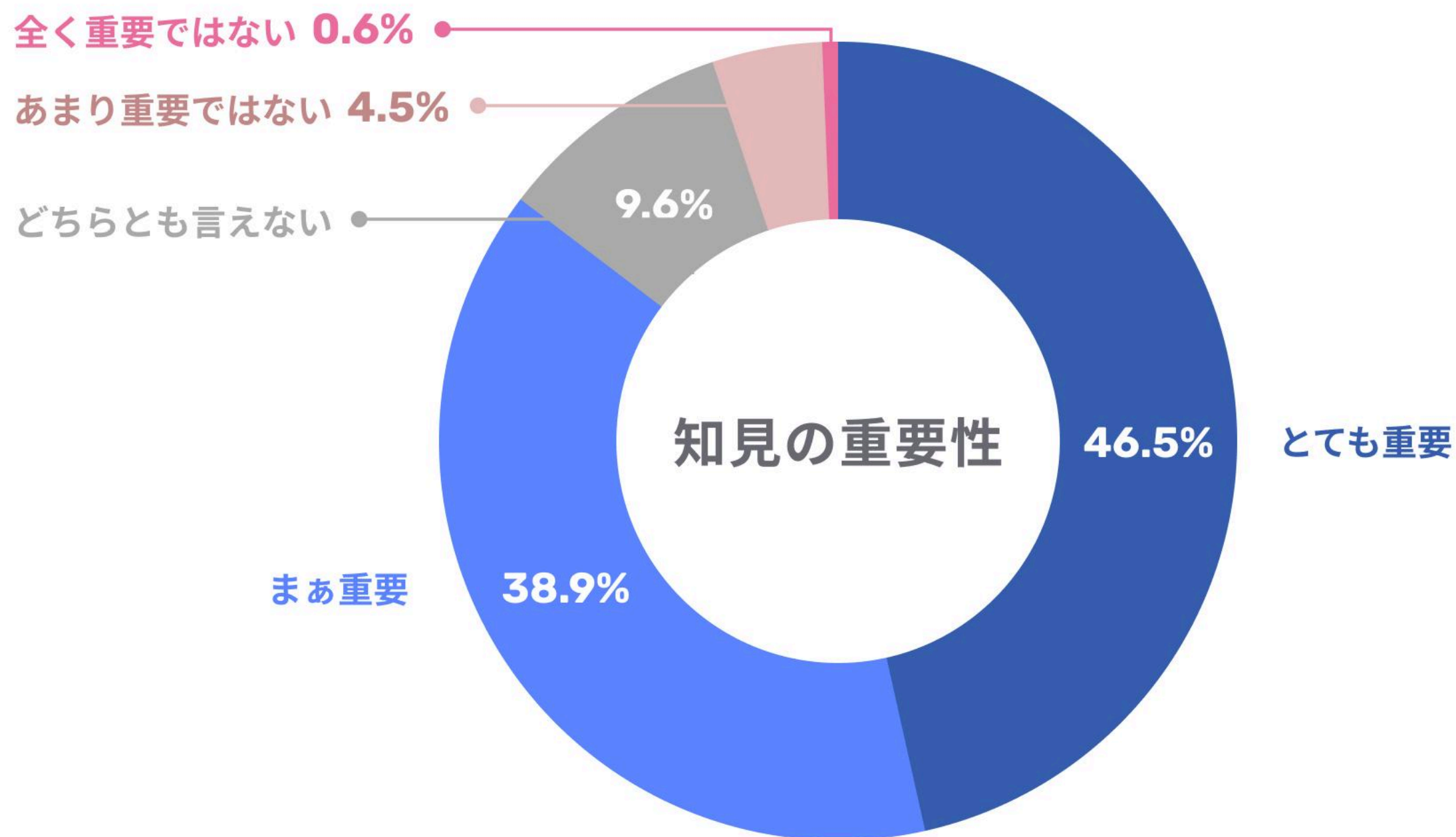
Coding Agentの活用は、もはや「出来ていなければマイナス評価」が4割を占めるようになっており、採用活動時から“当たり前”のものとして見られるようになってきている。

設問 エンジニア採用プロセスにおいて候補者の「AIツールや技術の活用度合い」は選考の合否にどの程度影響しますか？



## AIが普及する中で、人間のコンピューターサイエンスの知識は引き続き重要であるという回答が8割を越えている。

**設問** AIを活用した開発が一般的になる時代において、情報処理技術者試験などのコンピューターサイエンスに関する知見は重要だと思いますか？



## コンピューターサイエンスに関する知識が不足したことで起こった問題を大別すると以下の4つに分類できる。これらはAI時代に向き合う必要性が高まる可能性が高い。

### 設問

貴社の開発組織において、エンジニアの「コンピューターサイエンスやITの基礎知識が不足していることで問題が起きた」例があれば教えてください。

### ① 計算量・処理効率の問題 (Performance)

#### 典型例

- ・ 計算量を考えないコード
- ・ CPUの負荷増大
- ・ スケールしない処理
- ・ DBクエリの非効率

#### 必要な知識 (一例)

- ・ アルゴリズム
- ・ 計算機知識
- ・ データ構造知識

### ② 設計・責務分離の問題 (Architecture)

#### 典型例

- ・ マルチテナントの設計ミス
- ・ 状態管理の破綻
- ・ コンポーネント責務の崩壊
- ・ 設計思想の理解不足

#### 必要な知識 (一例)

- ・ システム設計
- ・ アーキテクチャ
- ・ 分散システム

### ③ 非機能要件・運用の問題 (Production)

#### 典型例

- ・ 運用コスト増大
- ・ セキュリティ考慮不足
- ・ 可用性や信頼性の問題
- ・ トークンコスト問題

#### 必要な知識 (一例)

- ・ SRE
- ・ システム運用
- ・ セキュリティ

### ④ レビュー・PRの問題 (Collaboration)

#### 典型例

- ・ PRの意図説明が出来ない
- ・ AI回答コピペ
- ・ レビューラリーの増加
- ・ ADR理解不足

#### 必要な知識 (一例)

- ・ 開発プロセス全般
- ・ 設計ドキュメント
- ・ レビューの作法

## 参考) CS知識が不足したことで、計算量・処理効率に関して起こった問題

### 設問

貴社の開発組織において、エンジニアの「コンピューターサイエンスやITの基礎知識が不足していることで問題が起きた」例があれば教えてください。

富豪プログラミングによってハードウェアのスペックを意識しない開発をし、システムが高負荷に陥るようなコードが散見され、レビュー負荷が増大した。

実装は完了しているし、要件は満たしているが、CPUの負荷が上がっていたり、アプリのパフォーマンス自体の検証を行うことができていなくて作ることへの速度は上がったが、今までめんどくさく頑張らないと行けなかったところがより面倒になり、蔑ろにされる傾向が見られた。そういったコンピューターサイエンスの基礎があればある程度わかるものもAIでよしなにやってくれるので、気づかないことが増えたと感じている。

計算量や通信遅延を意識せずに設計して性能問題が起きることがある。

計算量を無視したコード、ガードレールなどが無いコードなどが散見される。

計算量が及ぼすパフォーマンス影響等、コンピューターの動作原理を前提としたレビューコミュニケーションが噛み合わない。

AIで生成したコードを十分に理解しないまま実装が進み、レビュー時に設計意図の確認や大幅な修正が必要となり、結果としてレビュー者の負荷が高まるケースがありました。また、コンピューターサイエンスやITの基礎を十分に理解せずに技術を利用すると、負荷設計やセキュリティ面におけるリスクを適切に評価・管理できないという問題も生じています。

※回答原文ママ

## 参考) CS知識が不足したことで、設計・責務分離に関して起こった問題

### 設問

貴社の開発組織において、エンジニアの「コンピューターサイエンスやITの基礎知識が不足していることで問題が起きた」例があれば教えてください。

低解像度の指示を出すことによる低品質なコードの作成。  
アーキテクチャや既存コードの設計思想の読み込み等。  
LLMの入力を理解するアルゴリズムや回答の選択アルゴリズムを  
加味しない入力による遠回りな実装。コード設計の質の低下。

要件定義の経験がなく、AIが出力した内容の是非が判断できない。

マルチテナントのためのアーキテクチャ・設計になっておらず、  
セキュリティインシデントのヒヤリハットが起きたり、保守性や  
拡張性の低いコードやDB設計となっている。

業務委託者がAIの出力結果を鵜呑みにしてしまうため、現状の設  
計や一次情報を深く調査しない。

AI生成コードを十分にレビューせずマージするケースが増加し、  
後続の品質問題につながる事象が発生した。基本的なアルゴリズム  
やアーキテクチャの理解が不足しているメンバーがAIの出力を  
鵜呑みにするリスクが顕在化している。

※回答原文ママ

## 参考) CS知識が不足したことで、非機能要件・運用に関して起こった問題

### 設問

貴社の開発組織において、エンジニアの「コンピューターサイエンスやITの基礎知識が不足していることで問題が起きた」例があれば教えてください。

リリース後の保守や運用を深く考えない設計をしてしまったが故に、リリース後の運用のコストがかかる、といったことが過去あった。AIがコードを書いたり設計をすることも、それをApproveするのも引き続き人間がやる、という状況がしばらくは続くと考えている。このため、良い設計を作る、良い設計であるかを判断するためのソフトウェアエンジニアリングの力は引き続き重要であると捉えています。

コードの理解が浅いままPRのレビューに出す。  
イレギュラー対応が出来ない場合がある。例えばサイトが見れない場合にドメインの問題なのか、証明書の問題なのか、サーバーやインフラなのか切り分けが出来ないなど。  
AIの間違いを指摘できず間違っている情報で進めてしまう（情報のソースを読まない、読んでも理解できない）

トークン量を意識しない AI model の使用で**想定よりも高い利用料が発生した。**

**AIの検証結果を鵜呑みにして、実際の環境での検証をおろそかにする事例がありました。**

**開発にはコーディング以外の工程も多くあり、そこはAIが使えないため。**

**セキュリティ面に不安のあるツールを使ってしまう**

※回答原文ママ

## 参考) CS知識が不足したことで、レビュー・PRに関して起こった問題

### 設問

貴社の開発組織において、エンジニアの「コンピューターサイエンスやITの基礎知識が不足していることで問題が起きた」例があれば教えてください。

若手メンバーが、PRへのレビューコメントに対してAIに入れた結果をそのまま返してきて、やりとりラリーが増え問題が起きた。

若手がAIの生成したコードをあまりちゃんと読まずPRをあげるので、リードエンジニアがADRを書く負荷が上がっている。

型による静的解析によって何が担保されているのかという認識が人によって異なるため、レビューの速度に顕著な差が出ている。

PRについてどこを見てもらいたいかが伝えられない。質問に答えられない、など。

ジュニアメンバーのCoding Agent活用により、一見動作はしているが、運用保守や非機能要件の懸念、イレギュラーケースの考慮ができていないPRが増えて、レビューの負荷が上がっている。

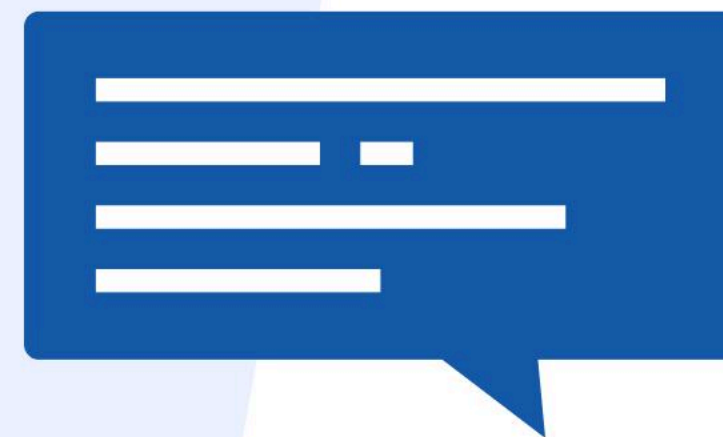
AIによるコードレビューの指摘に対し、「過去この書き方でリリースしたからこのままでOK」という誤った対応をし、AIに誤解を与える学習データとなってしまう。

AIの書いたコードや、AIからのレビューを意図をよく理解しないまま作業を進めることがある。また、人間のレビュー（先輩社員）からのレビューもAIにそのままなげるなど、結果無駄なプロセスになっている。AIが実装してきた内容が最適かどうかのジャッジに負荷がかかる。

※回答原文ママ

# おわりに

ファイナンディからのご案内



# レポートの内容をさらに詳しく知りたい方は ユーザーサクセス面談をご活用ください！

Findyではエンジニアの方との面談を行い、  
キャリアの壁打ちや転職支援を行っています

レポートに関連する「転職事例」「企業採用ニーズ」の解説に加え、  
ご経歴を踏まえた個別のアドバイスが可能です。

## 面談でお話しする内容の一例

- ・企業のAI活用の動向
- ・AI時代のキャリア選択の事例

※転職意欲がないのに無理に転職を勧めることは一切致しません。

ユーザーサクセス面談の詳細はこちら

<https://findy-code.io/us-lp>





# Findy

**本レポートに関するご意見はこちら**

レポートの感想や今後取り上げて欲しいテーマなど、  
皆さまのご意見を募集しています。

<https://forms.gle/YBJBpvubxZm9qrNF6>